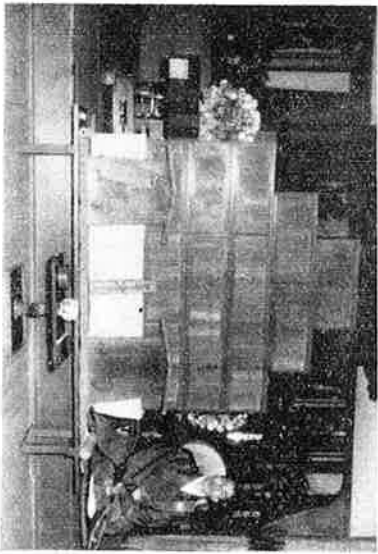


(2)佐田 善和王宮、宇佐郡安心院町の佐田神社、幸島潤士医師写



(3) 円寿寺大殿若経と茶任職

為唐介新撰文書
 此本家圖二湖堂有
 進之利之抄本
 抄本之筆跡
 其筆跡之
 三本之筆跡
 圓壽寺

(1) 大友吉統公大殿若経 円寿寺奉納文書

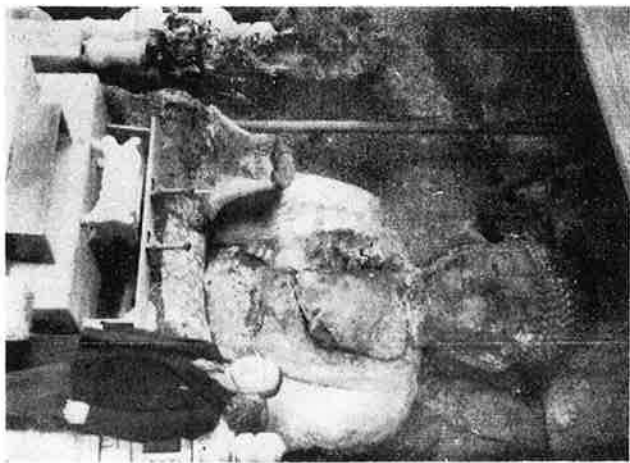


(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G)

(6) 円寿寺本大般若經刊行援助者 (曾清、鹿苑院光嚴、沙弥引阿、沙弥和妙、道初、宗嗣、長藏宗大夫、其他)



(7) 版記の系納神主: (西宮、北野天祖、振角明神、天照大神、貴布祢、明神、春日、若一王)



(10) 元明菩薩師公(彌真、四指定)之坐像

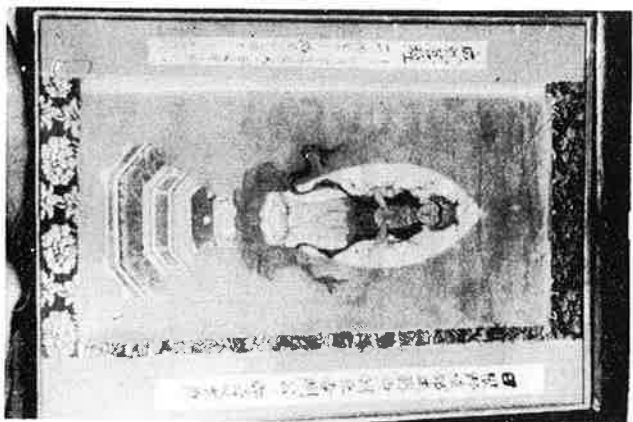


(11) 円寿寺全景



(12) 円寿寺開山道明遺文

008 日根野高明公像守本尊(絹本麻彩色)



007 日根野公寄附状

志不厭休海傍難茲稱自
予三極名譽亦其指水
代筆贈與金三物如滿
明應元年三月廿日發
清德金部
國書東指

006 日根野公像社再修理料下附状

修社也申有修費感込拜
江拜是名修之修理料
元相續主
中絶空明候成有申是
修費
修費高十有本修費如
社修費高

009 日根野大範君羅納稻修繕記

當山傳來之大
六面勲及价凶井性
古大友吉純公之寄
附而既驗數百之
望霜大極破却其依
之遠回身十方種
薄封新到於爲了仰
翼信心施主因此善
利現亡拙福壽欣愉
當來壹仏陀拿摩至
大歌
高孝
三郎

經版 大般若經の書誌学的研究

大分市円寿寺所蔵

大友吉統奉納大般若經に就て

立川輝信

目次

甲、序 説	三
一、序にかえて	三
二、文教の伝来	三
三、経論の伝来とお経の流布	三
四、版経	五
1、意義	五
2、製法	五
3、版経略史	六
4、最初の摺経	六
5、版経が生れた理由	七
五、納 経	九
六、春日版	一〇
七、大般若経の伝来と普及	一一
八、大蔵経と大般若経	一二
九、大般若経の摺刷	一三

一、大般若経の保存と伝本	一四
一一、大般若経と生活	一四
一二、加持と祈禱	一五
1、加持	一五
2、祈禱	一五
一三、仏教と密教	一八
一四、祈禱と大般若経	一九
一五、天台宗大般若法則	二〇
一六、大般若経と心経並に理趣分	二四
1、大般若波羅密多経	二四
2、般若心経	二六
3、理趣分	二七
一七、大般若経の形態	二七
一八、経絵	二八
一九、現存経経の主たるもの	三〇
1、久能寺経	三〇

2、	嚴島経	三二
3、	扇而写経	三一
二〇、	大般若経本の装幀と料紙	三二
1、	紙の色	三二
2、	莊嚴経	三三
廿一、	刊行年代と初刷後刷	三四
廿二、	武將の経典開版	三五
廿三、	経文の社前誌誦	三七
廿四、	徳川時代刊行の二大蔵一切経	三八
1、	天海版	三八
2、	鉄眼版	三九
廿五、	大般若刊行略史	三九
乙、	本論Ⅱ大般若経円寿寺本に就て	五四
一、	円寿寺本の由来	五四
1、	大友吉統の文書	五四
2、	佐田善神王宮の納経	五五
A、	巻頭書き入れⅡ佐田善神王宮	五五
B、	善神王宮奉納者	五六
C、	昌佐の系譜	五六
D、	佐田家系之裏	五九
E、	龍潭と玄蒼	六〇
F、	吉統の納経と佐田統景	六〇
G、	善神王宮奉納年月日記載形式	六一
二、	円寿寺本大般若経の考証	六三

1、	刊行助力者	六三
2、	刊者援助者の略歴	六四
A、	曾清	六四
B、	鹿苑院Ⅱ足利義満	六四
C	光厳	六五
D、	其他	六六
3、	奉納神社名	六六
4、	刊行時代の考証	六六
5、	経総	六七
6、	修繕	六八
三、	円寿寺略史	六九
1、	所在地	六九
2、	由緒	六九
3、	岩屋寺	七〇
4、	大友貞宗	七一
5、	中興開山道勇	七二
6、	日根野吉明	七三
7、	寛佐法印	七三
8、	松平忠直(一伯公)	七四
9、	円寿寺の文化財	七四
A、	古文書	七四
B、	遺物	七五
四、	終りに	七七
丙、	参考文献	七八

甲、序 説

一、序にかえて

大分市上野にある円寿寺に、大友吉統が朝鮮出陣の際武運長久を祈つて奉納した大般若経が奉納文書と共に現存している。筆者の管見によればこれが古文書に就ては学界周知であるが、古経に就ては未だその研究を見ない。否、今日その存在すら知る人が殆んどないと云つてよい。県下に多くを見ない古版本であるこの大般若経の由来とその書誌学的研究を試みることは、地方文化の探究上、何等か寄与する点のあることを思い、先づ之が解釈上必要な古経特に古版経一般に就て解説し、この論拠のもとに円寿寺所蔵の大般若経に就て不十分ではあるがこのささやかな研究を各位に提供して御批正を仰ぐ次第である。

二、文教の伝来

我が国に文教の開けたのは百済の王子阿直岐が来朝し、その推薦で王仁が漢籍を持ち来たつてからだとされている。其の後欽明天皇の十三年百済王から仏像経論を献じ、易・曆・医各博士、楽人等が相次で渡来し、我が国人の学に進む者が漸く加わり、厩戸王子（聖徳太子）の如きは諸学に通じ、仏教を信じ、憲法を制定し、三経疏を著わされた。次で遣唐使の制が起り、直接隋・唐から仏教や学芸が伝来して共に相助けて之が隆盛を見るに至つた。

三、経論の伝来とお経の流布

釈迦の説かれた教法を一定の文体に書き綴られたものが経で、その経文を普及し、またこれを後代に伝える方法としては、口授暗誦と、書写と、印刷とこの三種の方法の何れかに依らねばならぬ。しかしてその最初期は暗誦に依り、第二期は書写の方法が採用され、印刷術が発明された後は、書写よりも便利で正確な印刷に依ることになった。即ち経典の伝来史は第一期が暗

誦時代、第二期が書写時代、第三期が印刷時代で、版経は第三期の所産である。古いところは姑くおき、天武天皇五年（六六七）十一月には使を四方の國に遣して金光明経を説かしめ、同十四年（六八六）二月には諸國をして家毎に経を置かしめ、持統天皇七年（六九三）には國々に仁王経を講ぜしめ、同八年五月には、金光明経一百部を諸國に送置し、聖武天皇神龜二年（七二五）七月には諸國の寺々に金光明経または最勝王経を読むことを命じ、同五年（七二八）十二月には金光明経六十四帙六百四十卷を諸國に分ち、天平元年（七二九）六月には仁王経を全國に講ぜさせ、同九年三月には國毎に大般若経一部を写さしめ、同十二年（七四〇）七月には諸國毎に法華経十部、同九月には國別に觀音経を写さしめ（以上続日本紀）た等事例が多くあるが、これ等の経文は相当大なる量に上り之を書写するには容易なことではない。写経記事の初見は、天武天皇元年（六七三）三月「書生を聚めて始めて一切経を川原寺（大和高市郡、齊明天皇造立）に写」とあることで、奈良朝に入つては和銅五年（七一三）長屋王願経、神龜五年（七二八）の大般若経、天平六年（七三四）聖武天皇の御願の一切経、天平十一年（七三九）五月光明皇后願経、神護景雲二年（七六八）孝謙天皇の願経等の写経が作られて流布された。

当時これらの経典を書写する所を写経所といい、初めは写経司といつたが、天平十三年（七五一）頃、写経所と改められ後に写後経所・写疏所を分設し、写経所では主として、金光明経や法華経を書写し、写後経所では其他の一切経を書写し、写疏所では一般の註疏類を書写したようである。その外出家専属のものには金光明寺写一切経所・東大寺写一切経所等があり、貴族専属のものには北大家写経所・御執経所等がある。特設のものには東師経所・金字経所・称讚浄土経所等があつた。そして写経所には経師・校生・装漢・題師等の職員が居つて写経した。（中村孝也氏新國史觀卷三・十一―十三頁）その写経も経文の伝つた初めは、専ら実用のために之を写したのである。即ち僧侶は自分の研究のため、又は儀式に誦誦する為に之を写したものであるが、後には追々と俗人が自分の信心から経を写す功德によつて、諸の幸福を得、利益を蒙らうと、希望することがはやつて来た。したがつてこれを写すにも一字三礼という様に、非常に精神をこめて、謹嚴な文字で写す様になつたものである。

かく造寺・造仏と写経とを功德第一として奈良時代に至り写経は愈々盛んとなつた。天平勝宝年中東大寺では大般若経六卷が書写され、文武天皇の御追福の爲めに長屋王の発願になつた「大般若波羅密多経」は和銅五年と明記されてある。

かく写経は奈良時代に全盛を極め、平安・鎌倉と相つき後に記する如く尊氏願經の写経には、その奥付に毎卷願文を印刷して最後に自署している。かくて写経・写本が木版印刷となり、更に木版が近代的活字印刷へと発展したのである。而して写経・写本と木版印刷とは混交もしくは並行して千数百年に及び、その間木版印刷は徐々に普及した。

四、版 経

1. 意 義

版経とはいうまでもなく木版手刷の経卷である。世間一般に版経として注意されているのは古版本に属する版経であつて、近代に印刷された石版または亜鉛版などの実用向の機械刷のものではない。即ち慶長以前の版経で、慶長・元和・寛永の五十年間に印刷された古活字本はこれに準ずることになつている。

2. 製 法

木版印刷の技術は原始的のもので、現に存続している点から考へて最も命脈の長いものと思われる。その方法は先づ最初に厚さ五分ばかりの木版に本文を左字に彫る。通例両面に彫り、その幅と長さとは印刷に使用する紙の寸法に一致させることになつている。印刷の際は予め用紙に多少の湿度を与え置き、刷毛（はけ）を以て版木になるべく平均させる様に注意して墨汁を塗磨する。そしてその乾かない間に手際よく用紙を載せて、竹の皮で造つたバレンで全面を摩擦する。印刷が終つて刷られた紙を順序通り糊で継いで、卷子または梵夾装とする。時代が下ると卷子本よりも冊子本を多く作る様になつた。それで版経という言葉は直ちに折本即ち梵夾本を聯想させるが、卷子本並びに冊子本もある訳だ。（禿氏版経より）

3. 版 經 略 史

我が国に現存する最古の版經は「百万塔陀羅尼」として知られている四種の小卷子で、宝龜元年（七七〇）に完成された百万小塔に蔵められている。平安時代に入つては写經供養とともに摺字供養が行われ、これにやや遅れて、当時七大寺を擁して宗教都市の感のあつた奈良では、法相宗の章疏類を始めとして、多くの經文が版行され、鎌倉時代に及んでいる。世に之を春日版と呼んでいる。又建長年間以後、鎌倉・室町時代を通じて、高野山に於いて、高野版（冊子本が多い）が盛んに公にせられ、又鎌倉時代以後、禪宗の勃興につれて、語録の詩文集・儒書・医書等を含む五山版が行われた。宋版の大藏經の舶載に刺戟せられて、我が国に於いても大藏經開版の企てがあつたが五部大藏經の版行のみに止まつたらしい。文祿年間、朝鮮より活字印刷が伝えられてからは、經文版行の業が著しくなり、天海によつて活字版大藏經の版行が完成され、江戸時代を通じて版經全盛の活況を見ることとなつた。（後藤守一氏「日本歴史考古学」）

4. 最 初 の 摺 經

日本で最初摺經（仏經を印刷する事）を始めた平安朝の時代は、仏經奉写の功德によつて諸種の福利を希求する当代の信仰上の一風習から、延いて發生した現象であつた。それが平安期以来写經の供養が著しく貴族的な趣味行楽に墮する傾向を生じ一方にはその装訂・料紙並びに書式等に極力美術的な意匠を凝らし、莊嚴美を誇る裝飾經が盛行して、單に形式を飾る事を以て信仰心を満足せしむると同時に、又一方にはその數量の多きを望む上から、一時に遠かに多數を得る版經作製が注目される様になつたのである。それは間接には入宗沙門若しくは宋船の新たに渡來した宋版本（後には高麗刊本）に或種の刺戟をも受けたものとも考えられる。従つて摺經は信仰上、写經に對しては第二義的のものとして扱われ、写經の方が功德大なりとし、其の供養に於ても、必ず書写の經を本として、摺經は之に添えられたものであつて、單に摺經のみで供養を行つた例は、文献（願文等）の上に於ては見ることが出来ない。それは摺經が盛行した平安末期の著作東山往來書拾遺によつてもその消息を如実

に知ることが出来る。摺写の事実が文献に見えた最初は、御堂関白日記の寛弘六年（一条天皇十一年）十二月十四日の条に「中宮御産間、立願数体等身御仏造初、又大内御願千部法華經摺初」とある記載である。其の後平安期を通じて、摺写供養が盛んに行われた事は小右記・本朝統文粹・水左記・拾遺往生伝・僧西念供養目録・台記・人事記・広隆寺由来記・二中歴・長寛三年右文書等の公卿日記其他に見ることが出来る。而して摺写供養として最も多く供養せられたものは妙法蓮華經であつた。

5. 版経が生まれた理由

経本が写経から摺写へと發展したのは、第一に書写供養に代えらるる摺写供養の行事、第二は教義を研究する者に対するテキストの供給である。写経は天平時代に一大進歩し、平安時代に入つては、書写供養の風習は貴人の間には維持されていたが天平年間に於ける写経を模範として秀麗の書風までを継承して行くことは少なからぬ努力を要するので、支那から渡來した刻本を参考にして摺写供養へと進んだのである。なお経文には書写のことはあつて摺写のことはないけれど、この両者は過程を異にし、結果に於ては大差はなく且つ経文の精神にもとらなないと考えられて書写から摺写へと移行した。殊に鎌倉時代に至つて經典の開板は造経・造仏・写経と同一の功德があると信ぜられたためその開版刊行が盛んとなり、前時代のような小部の經典ばかりでなく「大般若波羅密多經」六百卷の如き大部の經典を刊行するに至つた。版経は既に述べた如く、原版を彫刻して、之に依つて器械的に多数の経巻を摺写するのであるから、敬虔な心持で一字づつ筆写する所の写経とはその間に大きな相違点がある。版経は写経の工業化されたもので、訓練された而も職業的の工人に依頼して始めて作製されたものであるから、その作製の過程に於ては宗教的の要素が乏しいが、一度原版を彫刻すれば、その後の摺写は簡單で、手数が僅少で多数の経巻が得られる訣である。その上写経の様に対校したり写し替へたりする必要もない。斯様に版経は原版の彫刻に多少の手数はかかるとしても多量生産が容易であるから記憶し難い場合、多数を要し且つ時間的に制約のある場合は版経にすることが最も便利で効果的である。（禿氏版経による）

さて南都仏教は政治との離脱と平安新仏教の開宗とによつて次第に沈滞した。南都を立脚地として弘法大師は開宗し、東大寺がその中心となつたけれども、次第にその根拠地は京師の方へ移つた。それで此の後南都仏教によつて立つ南都諸寺院は興福寺を中心としてその俗的勢力を伸張し、大夏を維持する事は出来たが、教学の点に於ては確かに衰頹を現わした。然るに平安末期となつて新興仏教なる浄土教が発生し、阿彌陀仏の念仏を説示し、それが当代上下に瀰漫した末法思想と結びついて民衆の間に急速に發展するに至つて、南都仏教・平安仏教共に愕然として覚醒し、この阿彌陀信仰に対して、此の新興仏教を論難する必要からも、愈々仏教の根本を見直す必要に迫られ、古仏教を再檢託する風を生じた。この機運によつてもたらされたので古經典の蒐集頒布であつた。特に仏典の頒布に資したのは春日板の開板であつた。(奈良朝文化の佐流二六八頁)

摺写供養には自から二種ある。甲は版木を新に作つて摺写するもので、乙は古い版木を利用して摺写するものである。

「本朝統文粹」卷十三に収むる所の明衝作「実成卿爲家督追善願文」(長久四年||一〇四三)の一節を引用して摺写なるものは造像置経の精神から出たものである。

又紫荊之契_三黃門_一矣、運暮之色自愁、稚草之蔭_三慈堂_二馬烈露之情未_レ識、方今摺々之忌忽々暗至、仍奉_レ図_二繪極樂曼陀羅一_一、奉_レ書_二寫金泥妙法華経一部八卷_一、奉_レ摸_二寫墨字妙法蓮経六十部、無量義経、觀普賢経各六十卷_一、便於_二法性寺中先公建立常行三昧堂_一敬供養矣、祈_レ生惠業資_二芳儀_一、

即ち浄土曼陀羅一誦を図し金泥経を書写し、墨字経を摺写し以て福業に充てんとしたのである。

次に研究者の必読に依じて作られた一例としては「戒唯識論」を指摘すべく、奈良の興福寺での法相唯識の研究は延暦寺を中心とした天台宗の興学に対抗して行われ、政治機関に遠かつた南都諸宗が挙つて努力したのであるから、法相宗の研究に必要な典籍中の主要なものが次第に開版せらるることになつたのである。

當時の研究法は各学生に無点の素本を用意させ、先づこれが読み方を授け、異説するものはこれを指示し、本文の誤脱等をも注意し、然る後に理論的の方面に互り、これを討究せしめたのである。

摺写供養の爲めに作られた版本でも時として研究者に利用されたこともあつたであろうが、典籍開版の動機からは上記の如くこれを二種に區別し得るのである。

摺写伝養の目的で作られたものはまた読誦用に充てらるることもあるので「六字神咒王経」の如きは秘法を修する際の読誦用として作られたのであるから、細かに区分すればこの種のもを第三種と見てもよい。(禿氏版経自四四至四五頁)

五、納経

仏教に於て經典書写の功德の広大なことは幾多の經典に見ゆる所で、従つて奈良朝以来供養の爲めに經典を書写することがしばしば行われた。しかして奈良朝から平安時代までの写経は高貴の人の願経は固より、私俗人のものに至るまで、之を寺に奉納するのが定りとなつていたが、特に僧侶の願経は神社に寄進するものが多かつた。伊勢神宮・春日神社・東大寺八幡宮等への納経がそれである。是は僧侶が其勢力を神社に張り出して神仏を融合せんと図つた性根から行われたものと見られる。

天平十二年の詔勅によつて諸国に国分寺を置かれ、其国分寺に納むる所の金光明経は金字を以て書かれたとのことであるがその帙が今現に正倉院に一つ遺つておる。可なり立派なもので、竹を心に入れて糸で織り、其の上に「天下諸国每塔安置金字金光明最勝王経」及び「依天平十四歳在壬午春二月十四日勅」という文字を織り出し、縁及び帯頭には茶地の錦に緋綾の裏を附けてある。頗る技術の發達したものはあるが未だ写経に伴う趣味と云う程のものにはなつていないとのことである。

天平十三年(七四一)閏三月甲戌(二十四日)宇佐八幡宮に、金字景勝王経及び法華経各一部を納め、度者十八人を置き、三重塔一基を造らしめ宿禰に賽するなりという事が統紀にある。この宿禰とはその前年天平十二年藤原広嗣の叛した時に十月壬戌(九日)大將軍大野東人に詔して、八幡神に祈禱せしめたことを指したのである。(辻氏日本仏教史之研究)

鎌倉期以後も引続き納経は行われたが往時程盛んではなかつた。それは一方に仏典の刊行が次第に流行し始めたので、写経

が著しくその数を減じたことに起因する。それで天子の勅旨経の如きは皆無となり、衆庶の知識経も大いに其の例を少くした。(日本書誌学概況)

六、春日版

平安朝の中期以降、京洛に於て朝廷や貴族社会で行われた摺供養に伴なつて開版された天台系統の經典が延暦寺で日吉神社の威霊をかつた様に南都の興福寺では春日神社の神威を發揚して運命を共にし、興福寺大衆の發願で開版される典籍には春日明神の威徳を増さんがために開版する旨を記入することがあり、終に奈良諸大寺の開版を世に云う春日版と呼ばれた。それで春日版とは興福寺の摺経ともいべきものでその開版の趣旨が前に述べた如く春日明神の法楽に資せんとしたものである。例を建仁度の成唯識論の刊記にとれば

為報春日四所之神恩、敬彫唯識十軸之論、撲為聖朝安穩天下太平興隆弘法利益有情矣建仁元年八月十三日始之、至同二年六月廿日其功畢、施入沙門要弘

とあるのがそれである。また春日版の嚆矢は寛治二年(一〇八八)三月僧觀増摸刻の成唯識論十卷である。今興福寺北円堂には多数の版木が蔵されて居り、現存古版本中の最古のものと言われているがこれは建久九年(一一九八)の成唯識論述記である。春日版は主として法相成唯識論関係のものであることは前述の如くであるが、貞応・嘉祿の頃には大般若經六百卷も開版されておる。こうした春日版の開版は東大寺・法隆寺の開版事業を促し、西大寺叡尊にも大般若經・梵綱經古迹記科等の開版がある。また高野版もこの春日版の影響を受けて盛んになったといわれている。(奈良文化の伝流二六九頁)

春日版の名称は明治以後の好書家に用いられるようになったもので、その範圍は人によつて異同がある。或る者は主として鎌倉時代に開版された書風の遒勁、墨色の佳絶、料紙の精良なものみに限り、その他の時代に開版された蕪雜なものとはならないが、一方書風・墨色・料紙等が優れていても跋文に春日明神に奉納する旨を刻記してないものは春日版と云わない。これ

に就て前者はただ古書愛好の趣味から出発したものであり、後者は餘りにも跋文に拘泥したもので、何れも妥当な説でないと言われている。もし学問的見地から云えば何れの時代たるを問わず、興福寺並びにその配下に属していた春日社で開版せられ一定の版式を備えているものは総べて春日版と称すべきであると本宮泰彦氏は其の著に書いてある。また禿氏は「世人は時として鎌倉時代の版本に就て何等の区別をせず、漠然とこれを春日版と呼ぶこともあるが、この名称は奈良の七佛寺あたりで開版された典籍に局限せらるべきものである」と云つてゐる。

それで春日版は何時から始まつたか不明であるが、前記の通り興福寺の衆徒によつて寛治二年（一〇八八）撰刻された成唯識論十卷は実に文献初見で春日版の先頭に立つべきものである。

当時南都の諸大寺が未だ全く開版事業に携さわらない時に興福寺が独りこれに手を染めたのは、この寺が藤原氏の氏寺として財政が頗る豊かであつたことと、藤原氏の繁栄に伴つてその氏神たる春日明神に対する信仰が頗る盛んとなり、経卷を社壇に奉納するということとなつたからである。それで春日社には夙に一切経や経所があつて、書写・摺写の経典を納められ、また模板をも收藏した倉庫があつたらしい。（日本古刷文化史）

七、大般若経の伝来と普及

そもそも大般若経は唐の玄奘三蔵が顯慶五年（六六〇）から龍朔三年（六六三）に至る四ケ年間に訳したもので五部大乘中の首位に置かれ、三世諸仏の知母、一切菩薩の慧父と称せられるものである。我が国には訳経後間もなく伝えられて、最も重んぜられ、広く信仰上に用いられた。そのため書写（後には摺写も加わる）と転読との功德が強く信奉されて仏典隨一の妙典となつた。

特に大般若経の流布した原因には、大般若経に「若し般若波羅密多の甚深法門に於て、一句を受持するも尚お無量無辺の功德を獲べし、況や大般若経に於て能く具に受持し、転読し、書写し、供養し、流布し、広く他の為めに説くことあらば、彼の

獲る所の福は不可思議ならん」とあつて、写経や版経の功德を述べてあることが起因となつてゐることが大きいのであるまいか。既に述べた如く版経は書写経の展開したものと見るべく、随つて写経に於けるが如く版経に於ても、法華経や大般若経が早く出現し、而も他の経典より重要視されて流布されたものと思われる。

続日本紀文武天皇の大宝三年（七〇三）三月十日の条に四大寺（大安・薬師・元興・弘福）に詔して大般若経を讀ましむ。度する事一百人とあるのが我が國での大般若経伝來を知り得る最古の文献である、以下統紀には聖武天皇神龜二年（七二五）閏正月十七日の条に、

請シテ僧ニ六百人於宮中一讀誦セシム、大般若経ヲ為レ除セ災異一也。

とあり、次いで同じく天平七年（八九五）五月二十四日にも宮中及び四大寺で同家安寧の為に転読が行われ、又同九年四月には、大安寺大般若会の濫觴の事が見える。即ち律師道慈が天勅を奉じて大安寺に住して以来、淨行僧を請じて毎年大般若を転読せしめていた為、災害が無かつたので、自今以後諸國の進調庸各三段の物を撰取して布施に宛て、僧百五十人を請じて転読せしめ、以て護寺鎮國聖朝平安を祈願する事を永く恒例としたいと願ひ出て勅許せられた。同じ年の五月一日には宮中で六百人の僧により。同八月十五日にはまた天下太平のために、宮中他十五処で転読が行われ、同十二年には大般若経一部等を写せしめて、民のために豊年を祈り、同十六年三月十五日には難波宮で僧三百人に、同十七年五月十四日には平城宮中で、同年九月廿三日には平城宮中で僧六百人をして之を讀ませた等、聖武天皇の御代のみでも頗る多数誦誦せられてゐる。（日本書誌学の研究自一四四至一四五頁）

八、大藏経と大般若経

大藏経という時は、普通一般には経典のみと思われたり、或は又どの大藏経も同じものと考えられるかも知れぬが、其実大藏経又は一切経と云つても、その内包は経典のみでなく、律もあり、論もあり、且つ学者の撰述もあり、その学者の中には支那や

日本の人も含まれているのである。また大藏經にはいろいろあつて、写經は略しても、版本には宋藏もあり、金藏もあり、元藏もあり、明藏もあり、麗藏もあり、日本藏經もある。更に日本藏經にも天海本もあり、鉄眼本もあり、大正藏等々がある。而して是等の諸本は何れもその所収部卷が異つてゐる。要するに大藏經として印成せられたものには沢山あるが、何れも何等かの点で違つたところがあつて、古今を通じて一つも同一の大藏經はないと云つてもよいのである。それで各種の大藏經はその名の異なる如く、所収の典籍の上に相違がある。また大藏經には本体と支体とがあつて、その本体は各種の大藏經を通じて先づ大体に於て同じで、異なるのは支体だと云うことが出来る。但本邦の大藏經中縮刷藏と大正藏とに新しい排列法によつたもので、他の大藏經の如く本体・支体の区別がない。そしてどの大藏經を見ても大般若經六百卷から始められているので、完成の大藏經でも写刊共に、最初の大般若經だけは完成している例が、後に記す如く我が國にもある。それだけ一切經の内で大般若經が重要視されていることが知られる。(仏教考古學講座第一卷所収常盤大定氏大藏概説)

九、大般若經の摺刷

大般若經の書写供養は鎌倉時代に入つても益々盛んとなり、吉野朝に於いても衰えず、更に室町末期に及んだ。一方鎌倉初期・貞応・嘉祿年間に興福寺で多数僧侶の合力で春日版として開版が行われたことは已に述べた。これによつて大般若經の信仰が如何に盛んであつたかを知ることが出来る。そしてその版本はこの後長年摺刷の要求を充たして損傷したため、吉野朝時代には漸次覆版補刻されて、これが室町中期以後まで引き続いて摺刷された。而してその覆刻の後摺本の中には種々異時の刊記があり、屢々覆刻が行われた如くに見えるが、それは同一版本を利用して摺刷した際の願文様の摺刷跋文と解すべきで、六百卷全部が度々重いて大般若經の信仰版されたものではない。斯様に全国の摺刷供養の要望が春日版開版の一原因をなし引を助長普及せしめる機縁を生み、書写と摺刷が相並んで行われ古來伝承の書写本は次第に減少して摺本が之に代つて用いられた。そして大般若經の転読供養は愈々盛んとなり殊に戦國の世に至つて人心は益々その功德にすがらんとした。それで版本が

磨滅して文字の判読さえ出来かぬる春日版の摺本が室町中期に逸出た。(日本書法誌学の研究)

だから同じ春日版経でもその摺刷年代に新古の別があり、且つ前述の如く吉野朝以後版本が磨滅して覆刻補版が加えられた粗悪な後刻本の春日版があると共にその外同じ吉野朝の頃に京洛で五山版と称する別版が開版された。(空前書—大和関に現存する古本大般若経より)

一〇、大般若経の保存と伝本

大般若経の現存する寺院は念仏宗・法華宗を除く各宗派で、僻村の山寺でも之を蔵するものが少くない。そして今も転読供養が行われている。然しその蔵本は主として江戸時代刊行のもので、その大半は鉄眼和尚の刊行した黄檗版で、其他に寛文開版のものが間々あり、まれには江戸初期印行の活字刊本もある。県下国東の富貴寺、三重内山の蓮生寺、大野郡神角寺所蔵本等は何れも鉄眼本である。

室町以前の大般若経伝本は頗る行われた割合に完存しているものが少くない。それは旧本が年代を経て自然に損傷脱落を生じた頃には代りが比較的に入手し易かつた為、使いいい新本と新陳代謝が行われたのである。殊に心ない住職は新本に魅力をい経本には執着を持たず紙魚の犯すにまかせ、果ては廃棄処分にするなどで次第に古本が影をひそめたのではあるまいか。

感じて古(川瀬氏著一五一頁)

こうした点からも後に誌す如く円寿寺が明治初期の排仏毀経で一時無住同様の時代さえあつたにもかかわらず、春日版とも思われる古い大般若経が完本に近く、しかも古文書と共に保存されていることは奇蹟的な幸福と云わなければならぬ。

一一、大般若経と生活

大般若経の書写、並びに摺写の所願も純信仰のみでなく、天変地異・兵革・疫病など、事あれば祈願し、国土安穩・金輪聖

主・玉体安全を祈請した時に行われた。殊に中世蒙古襲来の際、敵国降快・国土安穩を祈り、南北朝の吉野方が四夷侵降を祈つたり、己が宗派を基とする仏法興隆を願つたもの、一切衆生二世安全を願つたもの、特に縁故の人々の菩薩の爲、其他現世来世と、何事につけても願わしい事があれば大般若経の書写・摺刷並びに転読の功德を頼んだ。就中最も多いのは祈雨であつて大般若といえは直ちに祈雨が聯想されるほどであつた。(川瀬氏一五六頁)

熊本県天草郡新和小宮地では旧六月十五日大般若会が寺で修せられ、昔はその夜性の解放が行われたので此の行事を「豆の草引」と称したとのことである。(年中行事辞典)

二、加持と祈禱

1. 加持

大日経疏に、加とは仏日の光りが行者の心水に映ずること、持とは行者の心水が仏日の光を受持することであると云つてゐる。この神仏の力・絶対力・大霊の力と称する妙力不可思議な威力靈力が信者や衆生の心身の上に加被することを神仏の加被力と云うのである。本来行者や衆生や信者の自身には、もともと有力な力があつて能くこの神仏とか、絶対の力とかの加持力を受持して、その靈力威力と一致する作用性徳がある。これを衆生の功德力と称する。この本尊の加被力と、行者や信者の功德力が意気投合して互に渾然融和した時が即ち感應で、加持すれば感應が起ると云うのである。これを行者と病人との關係に就いて説けば、行者が病氣を癒してやりたいと云う熱誠と、修法の努力とが、病人の心身に闖入加被し、病人はまた行者を信じて、病氣を癒したい、必らず癒るものと云う信念と誠意がある。これが即ち病人本有の功德力で、この両者が互に感應して病氣を除去して本来の健康体に復するが加持である。

2. 祈禱

祈禱とは日本固有の詞で、イノルのイは忌みであつて、清淨潔斎、即ち齋戒沐浴すること、ノルは申し述ぶること、自己の心身を清淨にして御願ひ申すこと即ち請願である。而してその請願の対照は自分以上の強大な力を持つ有形無形のものでその力をかりてたすけて貰うことで、その対照とする強大な力は祈禱する人の信仰と、祈禱の目的によつて定まるもので、必ずしも同一でない。尤も祈禱の内にも自分より以下の者、即ち動物とか、小供とか、下僕に対して依頼するものもあるがこれは眞の祈禱ではない。邪道である。仏教ではその対照はいろいろの仏または経文で、その経文では大般若経が最も重要視されてつかわれるのである。

祈禱にも自分の為めにするものと、他人の為めにする場合とがある。他人の為めに祈禱するのは加持とかわりないが、自身自身の為めに行う場合の祈禱は、その目的が極めて具体的になつて居らねばならぬ。而して確乎たる誓約をすることが肝要である。

加持は病人や其他対人又は對物的に行うのであるが、祈禱は本尊即ち神仏に対して行うもので、加持祈禱共に、行者・神職・僧侶がやる仕事である。

祈禱は依頼請願であるから、行う者、受ける者は共に極めて禮儀正しく謙虚な態度を持たさなければならぬ。それと依頼する交換条件として願成就の上は報賽即ち御礼として予め斯様なことをするとか、先ず実行して後に祈禱するとか誓約する。

これを卑近な例でいえば、病氣を平癒させて貰いたいと祈願し、其の代りには今から好きな酒を止めるとか、煙草を禁ずるとか、または平癒後何か慈善を行うとかを誓約するのである。そして本尊即ち神仏の釈迦尊で、之に対し自受用法惟身（大日）が自内証の境をそのままに説く密教は大日を離れて一切無く、大日は一切の初めで、一切の終りであり、生命であると言ふ仏身論である。仏教は總く迄も卅五歳で成道し八十歳で入滅した歴史上の人物釈迦が仏陀論の基礎である。ところが密教は總く迄も理想上の仏陀、超歴史上の法身大日を以て仏陀論の根本とするのである。それで密教は仏教の中で顕教と相對する一つの立場で、秘密教とか瑜伽教と云われ、大智度論に基いて顕教が他受身、あるいは變化身を教主として相手に随つての方便の

門であるに對し密教は大日自性法身が自受法案のために隨自意の法を説く眞実の門である。

密教は印度以來發達していた考え方であるが、中國に入つて大いに發達し、我が國には断片的に奈良朝にも受密されていた。そしてこれを組織的に大成したのは空海で、最澄は天台開宗にあたり密教を取り入れ、その後円珍・安然に至る間に眞言宗の東密に對して台密を成立させた。台密の系統では大日と釈尊は表面は別体なるが如きも、その実釈尊を離れて大日なく、大日を離れて釈尊はない、二仏不二である。それで釈迦牟尼と云うも、毘盧遮那というも、名称の相違で、本来は一つであると大・釈同体を主張し、東密は大・釈別体説で、大日は法身、釈迦は生身であるとする。而して大日は密教の教主であつて普門の仏、釈迦は顯教の教主で一門の仏であると云うのである。

密では特に加持祈禱の儀式を尊重する呪術的宗教であるが故に漸次最初の哲學的立場を離れて儀式的の呪術的加持祈禱を重視して來た。殊に平安時代には上下共に密教信仰を抱かない者は殆んどないと云う程になり、その修法祈禱の効驗大なるを信じて、事の大小となくこれによらざるなきに至つた。

備考 六大六とは万有生成の元素たる万象を造る六種の根本実体即ち、地・水・火・風・空識の六体で、大は広大の義で、この六は万有能生の元素として宇宙に周遍するから大といふのである。非情は前五大の所成で、有情は六大の所成である。

法身二如来の三身の一、仏の眞身に法界に遍満する理智性。法身仏、法界身。

六大法身二密教で六大は宇宙法界に遍満して万有諸法を撰持するから法身といふのである。

天変地異・疾病・事故ある時には、名僧知識を招いて先づ加持祈禱をさせ、或は天皇即位の後には護持僧をして、不動・如意輪等の法を修めしめ、又天皇御不豫の際には五壇法を修せしめるなどと云う事が常の例になつて來た。祈禱と共に陰陽説が盛んに行われ、嫁娶・元服・葬儀等に就いて吉凶禍福の事を卜い、或は居所を転ずるなど瑣細の事に至るまで、陰陽家に托して其の日時・方位等を選びしめ、或は方違などとして一時方角をかえる為、他へ移つて居る様な事もあり、一挙一動皆陰陽家の説を聞かねば、安心が出来ぬと云うような煩わしい状態になり、迷信が次第に増加して來た。この風習は今後も引続き或は物

怪・死靈・生靈の祟や種々の奇怪な事柄を恐れ、疾病等も物怪の所為とし、医薬を服するよりは僧侶や陰陽師を迎え、有難い経文を読み上げて加持祈禱をなし、または呪文を唱えてその禍を払い除ける事を努めるような世の中となつて来た。(大森氏)

大日本全史八二二頁—八二三頁)

五壇法(一)密教で不動・降三世・軌荼利・大威徳・金剛夜叉の五大明王を本尊として兵乱の鎮定又は息災増益の為に修する祈禱法を云う。元和元年権律師喜慶が大日院に於いて此法を修したのを初とする。

(二)、密教で本尊壇・息災護摩壇・増益護摩壇・聖天壇・十二天壇の五壇を荘嚴して修する祈禱法を云う。天皇若しくは同家に關する重大の祈の時に之を行う。(禿氏仏教辭典)

一三、仏教と密教

人の行為活動は是を身体上と言語上・精神上の三方面から考察することが出来る。これを仏教では一般に身・口・意の三業と呼んでいる。換言すれば仏教は人の一切の活動を悉くこの三業と観るのである。而して密教ではこの三業を特に三密と称する。只々仏教では仏の三業を称して三密と云うこともあるが、我々衆生の三業を三密と称するのは、密教独自のもので三密即三業である。

密教の立場からいえば宇宙はそのまま六大法身の当相であるが故に、森羅万象悉く大日如来を離れては存在しないのである。如来即宇宙である。従つて法身大日の宇宙は、三世に亘り、十方に遍く、時間的にも空間的にも永劫に不滅である。かく密教は宇宙全体をば宗教的實在たる六大法身大日如来の姿と眺めるのである。

そもそも一般仏教即ち釈迦が衆生の機根に随つて説く教である顕教他受応化身の云う仏身論は当然三密と、行者・修法者の三密とが一致融合することを三々平等と称する。即ち修法者が、不動明王を本尊とする場合は、明王の印を結んで居れば、その印が明王の忿怒の形相と為り、また修法者が口に明王の眞言陀羅尼を唱ざれば、その眞言が明王の音声と化し、修行者が心

に明王を観念すれば、修法者の全身が明王の姿と同化し、本尊の身・口・意の三つが修法者の、身・口・意の三つと平等に成つて、更に差別がなくなる、この境地を三々平等と云うのである。この三々平等の境涯に達すれば、本尊が私の内に入つて来る。そうなれば我が本尊と同一となつて、本尊と同一の動作が出来る。これを入我という。また必至専念に本尊を観ずれば我は本尊の内に入つて我と本尊とが無差別となる。之が我入である。こうした境涯に達するには、勿論自分自身の勉強、修養努力・善行力がなくてはならぬが、単にそれだけでなく、師父とか、聖賢の教えとかの教道力がなくてはならぬ。その上に更に友人とか、社会の力というものがなくてはならぬ、この社会の力即ち環境の力を法界力と称し、我が功德力と、如来の加被力と、法界力との三縁が合すれば不思議の業用をも成就すると經典に説いてあるのである。即ち病氣でも自分の用心たる我が功德力と、如来の加被力たる医薬の力と、看護の力の法界力の三つが都合よく、合致すれば速かに平癒する。之を加持祈禱では本尊の加被力、信者の功德力、行者即ち加持祈禱を行う者の法力即ち法界力の三つが一致し、且つ熾烈であれば靈驗効果が顕著であると云うのである。

一四、祈禱と大般若經

密教の流行に依つて祈禱が盛んになり、殊に平安時代は前述の通り密教が全盛で、祈禱もまた全盛を極めた世の中であつた。

天台宗の如きも始めは天台宗と密教と禪宗と戒との四種を合せ所謂四種相承であつて、單純な天台宗ではなかつたのである。然るにその後慈覺大師・円仁・智証大師円珍が出て、真言の分子を多く取り入れて密教を尊重するようになってから、伝教大師の始めた天台宗とは大いに趣きを異にするようになった。そこでこれを天台宗の密教であるところから台密と名づけた。

一方弘法大師は雄大な華嚴の思想を背景に密教の教義を組織的に説明して、真言宗を開いたが、その後、宇多天皇・醍醐天皇の御代に益信（やくしん）聖宝（しようぼう）の二傑物が現われ、その系統がずっと長く後に続いて、所謂広沢流（益信）

と小野流（聖宝）とになつた。そうしてこの二流からまた多くの流派が出て三十餘の派となつた。この空海の流を汲んだところの密教は、その根本道場が京都の東寺であるので、これを東密と称したのである。この東密・台密とは相並んでこの時代の精神界を支配した。その結果として祈禱全盛出現に拍車をかけた。而して奈良時代に行われた祈禱は国家的のものが多くて國家の安危に關するとか、或は人民の休戚に關すると云うようなことについて祈禱を行うのが多かつたが、平安時代になるとこれに類する祈禱は少くなつて、反対に個人的の祈禱が多くなつて来た。（新訂日本文化と仏教八三頁） こうした個人的の祈禱は益々盛んに行われて今日に及び現に各地でこれが実況を見聞することが出来る。大分市南大分天台宗臨濟寺の如きも殆んど檀徒のない祈禱寺で盛んに祈禱を行っている。そしてその祈禱に大般若經の功德を活用して転読を行っている。

大般若經の圧縮された心經や理趣分が昔から今日まで活用されていることは世間周知のことである。

一五、天台宗大般若法則

大般若転読法會は各宗それぞれその基準とする法則があるが天台宗比叡山に屬する寺院の法則を示せば次の如くである。

先三礼

次如来唄 如常

次神分

抑大般若転読之場、祈願成就之御、為下浪ニ受法味、証明 功德上来臨影向、処神祇冥道、總 若日本國中三千餘座大小神祇殊 者円宗守護山王三七部類眷屬赤山明神等、併為ニ法楽莊嚴威光增益一切神分

般若心經 丁

大般若經 丁

謹敬 白ニ一代教主釈迦大師十二大願医王善逝六八弘誓無量寿仏、般若妙典、甚深法門、八万十二權実聖教法涌波濤等、諸大

薩善吉滿願等、諸賢聖衆、凡者仏眼所照、微塵刹土、三宝境界、而言方今於三南閻浮提大日本國何國何郡何寺此道場、信心施主某為二、転禍為福一、当病平癒一、請衆僧令、転ニ讀大般若經六百卷一事

其旨趣如何者

夫

大般若者三世諸仏成等、正覺、智母十方薩埵、所レ宣、尽淨虛融、旨、所レ説畢意空寂、ナリ

依之

転禍為福之基

無レ超ニ般若威力ニ

厄難消除之謀

無レ過ニ智度妙用ニ

是以

捲ニ鈎本尊之宝籙一、転ニ讀大般若、真文一

若爾者

転読梵風、遠弘ニ魔障一、総持妙薬願、無レ不レ成

伏乞

冥顯、神祇隨ニ喜善願一、影向天衆、納ニ受法味一、啓白言淺三宝知見

至心発願、転読般若

功德威力、天衆地類

倍增法案 正法久住

信心施主 心中所願

決定成就 決定圓滿

及以法界 平等利益

衆生無邊誓願度 福智無邊誓願集

法門無尽誓願學 如來無邊誓願事

無上菩提誓願証 護持施主成大願

一切諷誦 丁

次轉讀發音

次轉讀畢結願作法

先三礼 次如來頌

抑上來雖^セ轉^レ讀^ニ誦^ハ經^ヲ王^ニ、凡夫且縛^ノ之身三業、雜乱^ノ文字章句殘闕^ス、故重^ニ轉^テ讀^メ之^ヲ、以可^レ成^ニ補闕^ト分^ト

一切諷誦 丁

次一卷轉讀發音

抑大般若轉讀^モ之庭^ノ消災召福^ハ之砌^ノ從^リ開白^リ之始^メ、至^ル結願^ノ之今^ニ、所^ノ影向^シ神祇冥衆^ヲ重^テ為^メ法樂莊嚴^ニ倍增威光^ト一切神分^ニ

般若心經 丁

大般若經名 丁

至心勸請釈迦尊 十方三世諸善逝

大般若經深妙典 八万十二諸聖教

法涌常啼諸薩埵 滿願身子諸賢聖

梵釈四王諸護法 十六會中諸聖衆

還念本誓來影向 証知証誠講演事

至心懺悔無始來 自他三業無量罪

今对宝前皆懺悔 懺悔已後更不犯

我等至心受三歸 歸三宝竟持十善

乃至如來一実戒 生々世々無闕犯

願我生々見諸仏 世々恒聞般若經

恒修不退菩薩行 疾証無上大菩提

大般若波羅密多經初分緣起品第一

將^{スルニ}釈^{セシメ}此^ノ經^ヲ、以^テ三^ノ門^ニ可^シ分^ス別^ス、初^ニ大意^者顯^ニ演^テ諸^ノ法^皆空^ヲ、破^シ於^テ實^有之^執、密^ニ說^テ雙^ニ非^ノ妙^理、顯^ニ於^テ中^道之^躰、是^レ此^ノ經^ヲ、

大意也、次題目者大^ト者^ハ大^ト円^ノ滿^ノ之^義也、般若^者無^レ相^ノ空^ノ寂^ノ之^智、波羅密多^ト、到^テ彼^ノ岸^ノ之^義經^ヲ、者^ハ仏^ノ説^テ通^ス号^ス也、初分者十六會初、

緣起者起經本、緣品者類同之義、第一者居^レ首^ニ故^ニ云^フ大般若波羅密多經初分緣起品第一二三入^レ文^ヲ判^ス釈^ス者、夫^レ此^ノ經^者一^部

六百卷二百六十五品、大^ニ分^テ爲^ス三^ニ、初分緣起品^ヲ爲^ス二^ノ序^分、從^テ二^ノ學^觀品^ニ至^レ、第十六般若波羅密多分後五百歲饒益有情^ニ

爲^ス三^ノ正宗^分、自^リ爾^時世^尊告^ク賢^守苦^薩、訖^シ經^ヲ流^通分^也一^經、三^段大^概如^シ斯^ノ

抑^テ捧^テ般若^經、誦^ス之^惠業^ヲ、奉^ル備^ハ本^尊之^法味^ニ

仰願

一天泰平 四海靜謐

仏日増輝 法輪常転

施主心願 皆令満足

乃至沙界 利益周徧

次六種回向

以上

一六、大般若經と心經並理趣分

1. 大般若波羅密多經

六百卷 唐 玄奘 訳

大般若波羅密多經は六百卷あり、般若波羅密多は古來訳して明度と云う。これは此經が諸仏の智母、菩薩の慧父、煩惱を斷つ宝刀、愛河を渡るの舟楫、利生の極致、成道の彼岸に到達し得べき大智の船であるからである。梵本で猶存するものが多くその完訳は唐の玄奘に俟たなければならないが、別訳・抄訳は甚だ多く、現在世に行わるるものばかりでも三十部もあり、註解の類もまた少くない。玄奘は本名を諱、姓は陳氏で、撰論に就て疑問を起して唐の貞觀三年（六二九）入竺を志し、七年（六三三）中印度に至つた。それより仏蹟を巡拝しつつ、玄鑑に瑜伽論を学び、諸國を通過して諸論師から諸種の論を学び、後那蘭陀寺に留つて、戒賢論師から瑜伽地論・唯識論等を受け、論に代つて外道を摺伏せしめ、其後貞觀十九年（六四五）京師に至り、獲る所の梵本六百五十七部を朝に献じた。唐の太宗皇帝命じて弘福寺で翻譯せしめ、後、大興寺に居らしめた。その訳する処、龍朔三年（六六三）に録するに七十五部、一千三百餘卷に達した。

本經は全六百卷あり、四処十六会に分れ、各会の初に玄則の序を置いてある。組織は次の通り。

初 会

白卷一

至卷四百

第二 会

白卷四百一

至卷四百七十八

第三 会

白卷四百七十九

至卷五百三十七

第四 会

白卷五百三十八

至卷五百五十五

第五 会

白卷五百五十六

至卷五百六十五

第六 会

白卷五百六十六

至卷五百七十三

第七 会

白卷五百七十四

至卷五百七十五

第八 会

耶伽宰利分

舍衛城

第九 会

能断金剛分

舍衛城

第十 会

般若理趣分

他化自在天

第十一 会

布施波羅密多分

至卷五百八十三

第十二 会

淨戒波羅密多分

至卷五百八十四

第十三 会

安忍波羅密多分

至卷五百八十九

舍衛城

第十四 会

精進波羅密多分

至卷五百九十一

第十五 会

静慮波羅密多分

至卷五百九十二

靈鷲山

第十六 会

般若波羅密多分

至卷六百

竹林精舍

右六百卷は、之を要するに、諸方皆空の思想を開闡して餘蘊無きものと云うべく、大藏經中、最も重要な地位を占むるものである。此經によつて色法に捉わるる縛著を碎破し、明慧開けて菩提に入ること速かなるが故に、古來衆妙の淵府、群智の玄宗、万法の本跡、衆聖の円極と称せられ、受持読誦書写供養せらるること又大藏中第一と云うべきである。

〔昭和〕
〔新纂〕 国訳大藏經仏典解説（自二二八頁―至二三〇頁）

2. 般若心經

般若心經は略してただ心經、詳しくは般若波羅密多心經で二百六十二字の間に般若經の必要を簡潔に説いた經である。

般若の言葉はもともと印度の語をそのまま写したもので、翻譯すると智慧ということになるので智慧即般若である。この般若の智慧を仏教では実相と觀照との二方面から見ると、相は般若の真理で、觀照は般若の智慧で何人も認めねばならぬもの道理と、それに合致する智慧がこの実相と觀照との二様の般若である。その般若の道理と智慧とを文字によつて示したものが文字般若である。

三世の諸仏は般若波羅密多に依るが故に、般若は仏の母といわれ一切の諸仏を産む母で諸仏出生の根源であるから般若の智慧がなければ仏とはいえない。慈母の權化觀自在菩薩が深般若波羅密多を行じて一切は空なりと觀せられた。古聖が「色即是空と見れば、大智を成じ、空即是空と見れば大悲を成ずる」といつたのはこの境地を道破したものである。だから心經の最初に「觀自在菩薩、深般若波羅密多を行ずる時、五蘊を皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまふ」と云つてあるのである。慈母の權化である菩薩、仏の化身である觀音も、般若の智慧を、親しく磨いて一切は空なりということを体得せられたればこそ衆生のあらゆる苦惱を救うことが出来るのである。

波羅密多般若と同様に梵語の音をそのままに写したもので翻譯すると彼岸に到る即ち「到彼岸」と云う意味である。仏教では現実の世界、迷える私達の不自由な世界をば、この岸即ち「此岸」しがんと云い、これに対して、理想の世界、悟れる自由の世界を称してかの岸即ち「彼岸」ひがんと云うのである。故に波羅密多とは此岸より彼岸へ渡ること、つまり人生の目的地へ入ること、ゴールインすることである。それで古来これを簡単に「度」と訳した。即ち度は「わたる」ことで、この岸から向うの岸に渡ることである。仏教の理想の世界、即ち彼岸とは仏陀の世界であるから、彼岸へ到達するとか、彼岸へ渡るといふことは結局仏となることである。而してこの此岸から彼岸へ渡る場合に自分独りで渡るか、それとも大勢の人々と

一緒に渡るかによつて自然に小乗と大乘との区別が生じてくる。それで小乗とは小さな乗り物、大乘とは大きな乗り物で、自転車と汽車やバス、汽船等との相違が生ずる訳である。

経ニとは梵語の翻譯で真理に契（な）い、衆生の機根（せいしつ）に契うと云うところから契経（かいきよう）と訳されたもので、要は聖人の説いたものが経で仏陀の説かれたものである。

之を要するに心経即ち般若波羅密多心経なるお経は、人生の目的地は何処にあるか、如何にして我等は、仏陀の世界へ到達すべきか、仏陀の世界へ到達した心境はいつたいどんな状態にあるのか」ということを極めて簡單明瞭に説かれたお経で、その詳しいのが大般若波羅密多経である。

現今心経の訳本は七種類あるが普通心経といえは殆んどすべて玄奘三蔵の訳した経本を指して云うのである。而してこの心経の「般若波羅密多経」の上に「摩訶」更にその上に「仏説」の各二字を加えることもあつて学問上からはいろいろと議論はあるが、その意味に於ては別段違ふところはない。（般若心経講義）

3. 理 趣 分

理趣分は般若理趣分とも云い、大乗金剛不空真言三摩耶経の異名であり内題には「般若波羅密多理趣品」とある。これは不空の訳で理趣釈二卷、弘法の理趣経開題五卷、亮典の純秘鈔三卷がある。

別に金剛智訳の金剛頂瑜伽理趣般若経一卷の略名がある。是れは般若経の異訳で大日如来が金剛薩埵のために一切法の自性清浄なることを説いてある。訳出は天寶五年から大曆九年までの間である。

一七、大般若経の形態

歴史が証明するように何処の国の書籍も、其の原始の形は巻物であつた。我が国も支那に学んで最初は卷子本を以て書籍の

本形として、儒書・仏典すべてこの形態であつて、奈良・平安・鎌倉の各期を通じて永くこの卷子本が行われた。然し卷子は短いものは別として少々長いものは巻舒に不便なので、後には冊子形及び帳子形（折本形）を喜ぶようになった。それで經典の刊本も強いて卷子の形をとらず、特に転読用のものは帳子本（折本）漢語で摺本）がその取扱に最も都合がよいので盛んにこの帳子形が用いられるに至つた。大般若経は殆んど転読に用いられるので勿論帳子形となつた。（日本書誌学概説七八頁）

一八、経 絵 Ⅱ（絵経）

経絵というのは、経巻の主として見返しの部分すなわち表紙の裏に、その経巻の内容の一部を主題として描かれた絵面をさす。栄華物語によると、治安一年（一〇二一）に皇太后妍子の女房たちが無量寿院において供養した法華経は、見返の絵として涌出品に恒沙の菩薩の湧出の図、寿量品に常在靈鷲山の図、提婆品に龍女の成仏の図といつた図がらが描かれた。また、万寿一年（一〇二四）には色紙経の見返に経の内容を描かけたこともみえる。この種の経絵は現存する遺品も多く、かつ製作年代の明らかにされるばあいも少なくないので、絵画的にも小品ながら重要な資料となつてゐる。この経絵には紫紙または紺紙に金泥・銀泥、または金銀泥を併用して描いたものと、普通の料紙に彩色で描いたものと二種がある。いわゆる中尊寺経などは前者で、後者の代表的な遺品には、久能寺経と平家納経とがある。古い例としては、京都神光院にある般若心経の紫紙に金銀泥で描いた絵がある。細く強い描線で觀音菩薩の霊場である補陀洛山の図を描いた。十一世紀も前半ごろの作である。十二世紀になると、遺例はいちじるしく増加する。最も代表的なものをあげると、中尊寺経・神護寺経・荒川経など的一切経がある。中尊寺関係の一切経は永久五年（一一一七）ごろ藤原清衡の発願したのが一種（金剛峯寺）、安元二年（一一七六）の同秀衡の発願したものが一種（岩手中尊寺）と二種ある。前者は金銀泥を用いてゐるのが珍しく、図様は比較的簡單であるが、描線のはびやかで動きがある。神護寺経（神護寺など）と紀伊国荒川荘の関係でそうよばれる荒川経（金剛峯寺）は、ともに保元一年（一一五六）に歿した鳥羽法皇追善のために発願され、当時第一流の作品と認められる。（日本美術全史上卷二八

繪經は唐代の中頃から寫經の一種として作られ、經卷の初めに佛像とか、說法圖とかを加えた事に由来するようである。經文を寫す際に上部に餘白を作り、これに図解を施す事もあり、また經文の中間に図画を挿入する事もある。繪經は印度にあつたか否かは不明であるが、貝葉經を挟む板に彩色を加え、いろいろ裝飾的の紋様なり、図画なりを加える事がある。

卷首の扉繪はこの種のものから出発したのではあるまいか、扉繪のある版經としては、咸通九年（八六八）の金剛般若經、北宋の初、錢弘淑の開版した宝篋印陀羅尼があり、五代頃に印刷された陀羅尼で繪入のものが少くない。宋代の繪經では阿彌陀經・法華經・普門品・文珠指南國讚・仏頂心經・父母恩重經等が広く行われた様である。

我が國の繪經として扉繪を加えたものに元弘元年（一一三三）の首楞嚴經を始とし、法華經・大般若經・金剛般若經・梵網經等があり、また多数の繪を加えた繡像經としては次の如きものがある。

一、大報父母恩重經一卷 永徳三年（一一八三）刊

二、阿彌陀經一卷 応永十五年（一一四〇）刊

三、薬師本願經一卷 同十九年（一一四二）刊

四、法華經八卷 永享五年（一一三三）刊

以上の四部の内、第一と第三とは經文と繪とを交互に配し、第二は上欄に口繪を下欄に經文を配置して因果經の様式によつてゐる。第四は毎卷にそれぞれ異つた扉繪を加えてあるが、これも繪入經の一種と見るべきである。一般に行われている扉繪は最初の一巻だけにこれを加えて置くだけで毎卷にちがつた繪を加える様なことは特例である。（禿氏板經）

また我が國で繪經の最も古いものも高野山に藏されたという「因果經」であると云われている。これは上部に經文の意義を彩色画で描出し、下部に經文を寫したもので、經文と繪画と別々になつてゐる。これより後のものには繪画の彩色したもの、又は白描の上に、經文を寫したものが多い。而してその繪画には、經文又は仏教には全然關係のない裝飾としての風

俗絵もあつた。又経卷の裝飾として佳麗な絵画を用いたものには久能寺経や、厳島の平家経などがある。(日本文化出版史三〇頁)

次に経文を宝塔・蓮台・天蓋等を以て境界書写し、兼ねて莊嚴を加えたものがある。その宝塔のもので書写年時の明確なものに、長寛元年(一一六三)書写の妙法蓮華経並びに無量義経がある。(日本書誌学の研究三〇九頁)又蓮台(又は蓮座)を境界に用いているものには福島県龍興寺藏の法華経及び原家旧藏の法華経勸発品第二十八の一軸等がある。龍興寺藏本は平安末期の筆で、毎行十七字、五彩の蓮座(複弁)を画いた上に経文を一字宛書写し、之に界線を加えている。原家旧藏の法華経勸発品第二十八の一軸は平安末期の筆にかかり、厳島の平家納経に匹敵すべき莊嚴で、毎行十二字、銀の行界に金の円相を画いて、一字一仏の意を象り、蓮座には五彩を施し、上下欄には金銀切箔、砂子桜花の模様を加え、見返には法華讚歎の僧侶を画いてある。次に天蓋蓮座の境界経は、古筆家の間に後鳥羽天皇辰筆と伝える「清水切」と称する法華経であつて毎行銀界の上部に天蓋、下部に蓮座(単弁)を捺印してある。(日本書誌学の研究(一一二頁))

経の見返しに絵を描くことは公任の一品経和歌などに因をなしたのであろう。浄土思想の普及に従つて写経に意匠を凝らし表紙や見返しに絵を描いて経卷への親しみを待つよすがとし、料紙の撰択にもやがて新規を求めて精神的に満足を得たと田中氏古写経の鑑賞(一一二頁)には書いてある。

一九、現存絵経の主たるもの

1. 久能寺経

永治元年(一一四一)七月二日、鳥羽上皇崩御の時の結縁写経と思われる久能寺経は、法華経開結を具備した一品経三十巻で、もと京洛の上皇の離宮であつたのが保安四年(一一二三)御落飾と同時に淨刹となつた安楽寿院に納められたものである

が、いつの頃か駿河の久能山に移納されていたのでかく稱するのである。その久能寺も今は廃寺となつて経卷は観音堂鉄舟寺に十九卷保存され、他は散佚して諸家の有に帰している。

この経卷には料紙に金銀砂子・切箔・野毛などを用い、或は紫の雲様にし、上下に下絵を施してある。また妙音品などは箔界・花鳥などすべて銀を以てせるものである。そしてこの巻物の見返し（巻初）には極彩密画を描いてある。但し風俗画で巻中の文意にはいささかの関係もない。（古写経の鑑賞・日本書誌学概説）前記の如くこの久能経は早く民間に散伝し故朝吹英二氏や益田孝氏も各一卷づつ所有している。

2. 厳島経

厳島神社は、平家一門の信仰が格別であつたので、この神社の絵経は平家一門一族が丹誠を込めて奉納したもので、現蔵は法華経廿八卷、開結二卷、阿弥陀経・般若心経各一卷と別に清盛の願文一卷である。何れも金銀を砂子にして蒔いた料紙に、種々の美しい文様を描き、其上に写経したもので、見返しに極彩仏画、或は風俗画を描いてある絵経である。（日本書誌学概説自一五六頁至一五九頁）

3. 扇面写経

藤原氏末葉に行われて趣味性の著しく表現されたものとして、扇面型の料紙に金銀切箔押し、砂子散らし、或は墨流しなどを以て装飾し、これに空罽廿四行を施し、使面の中央から折り、一葉宛糊付にした所謂粘葉装冊子法華経がある。現在四天王寺には解体のもの五十一枚、東京帝室博物館には原装のまま巻八が一帳、其の他に一葉づつ所蔵されている。この経は料紙の見開の箇所世俗の種々相を扱つた下絵が極彩色を以て描かれ女人・小児を扱つた絵が多く、所々に版画を応用して彩色によつて変化を求めているところがある。経の書写法は一卷経であるから、数人の手になつてゐる訳だ。寺伝では聖徳太子となつ

ているが、これは信仰上からの伝えて、実は天王子信仰の盛んであつた文治四年（一一八八）九月十六日に納経せられた後白河法皇御関係のものである。（古写経の鑑賞一四六頁）

因みに経が法華経に限られているのは当時、この経が万経の随一として家々に尊信せられていたかを知ることが出来る。なおこれと同一系統の繪経を所有しているものに、大和玄隆寺と藤田家（故平太郎氏）・故朝吹英二氏・久原文庫がある。この経絵画の大体の輪廓を版画にしたものが多い。後年の仏像類版画はここに胚胎して居るものと思われる。特に鎌倉期に入つてこの版画は次第に抬頭し流行するに至つた。

二〇、大般若経本の装禎と料紙

1. 紙の色

大般若経の料紙には雁皮・楮・麻等いろいろあるが、紺紙を除けば大半は黄色に着色したものをを用いてある。そして写経には殆んど界線が加えられている。

大般若経の料紙を黄色に染める理由に就いて東山往来（応永十一年一一四〇四）の写本に書経可用黄紙状卅八、附五部大乘経巻数の条に

謹言。五部大乘経奉書之思急^ニ發矣^レ。其料紙、黄白中可^レ依^ニ何色^一。復件五部^{トハ}何耶。巻数幾乎。可^レ被示者也。
謹言。

請^レ写経兩条、狀一経料帶色事右経料紙、宜^ツ用黄色。一依^ハ養惟^一、二依^ハ旧例^ニ、依^ニ養性^一者、眼^ハ木性也。黄^ハ土色也。木^ハ以^レ土^ヲ為^レ財。是故眼被^ラ養^レ土^ヲ為^レ藥矣。若眼多見^ニ白色^ヲ者為^レ恐矣。白者金色也、為^ニ眼之怨^一也。金剋^レ木^ヲ故。依^ニ旧例^ニ者大般若経^ニ明^ニ法誦菩薩^ノ所持^ニ経^ニ云、真^ニ金葉^ノ上^ニ銷^ニ瑠璃^ノ法^ニ、書^ニ般若経^ニ云々。末代^ハ可^レ依^ニ其流^一者也。又黄色紙用、有^ニ多種方^一。不可披書。（下略）

と見えており平安末期には右の様な所々に拠つて黄色を用いていたことがわかり、現在諸本が殆んど黄色である理由も明らかになる。又料紙を黄蘗（きはだ）又椽汁（つるばみ）で染めることは防虫の爲めでもある。古く奈良時代の写経には、色紙経以外はその九分九厘まで黄蘗又は椽汁の染紙を用い、白紙のままのものは極めて少ない。伊勢神宮の忌詞には経巻のことを「そめがみ」と称すると云うが、その拠る所は当代にまで上り得ることを知ることが出来る。（奈良時代文化雑攻一六八頁）

古今著聞集等に大般若経の断紙を「きはだ」の紙と呼んでいるのも右の様に黄色の紙を用いながらもそれが「きはだ」で染められているからである。

巻軸も普通は木製漆塗の合せ軸で、鍍金の銀杏型を用いているもの、或は彫刻を施したものも存在し、表紙は主として地味な染紙を用いているが、金銀其他の塗料を以て装飾を加えたものも少くない。紺紙を用いたものは金銀字を以て染筆が行われ其の界線にも金銀が用いられている事は他の古写経の例と変りはない。又扉絵を添えてあるものが多い。室町中期以降に作成せられたものには当初からの折本が多いが、それ以前のものも最初は卷子に仕立てられたものである。然るに現存の諸本は後世転読の際、巻軸に不便を感じた為、漸次折本に改装せられたものが多いのである。折本には紙帙に包まれたものが少くなく六百巻結願と共に厨子を造つてこれに納める最も鄭重な取扱もあるが大半は唐櫃・経箱の類に納めてある。

2. 荘 厳 経

奈良時代までは、材料の上に色々変つたものを使用することはあつたが、まだ趣味という程度までには至らなかつた。用紙では紫紙或は紺紙を用い、墨の代りに金泥又は銀泥を用いなどし、紙質にも斐紙或は穀紙などがあり、稍貴重なものとしては茶毘紙を用いたことがある。また金塵紙といつて金箔をふりかけた紙もあるがこれは頗る稀覯に属するものである。字の大小も有名な大聖武のようなものも、稀にはあつたようだ。紙の長さも所謂長紙を用いたものもあるが、趣味とか、道楽という気分は殆んど認むることは出来なかつた。前述の如く我国では平安の中頃までは写経の荘厳は未だ装飾の意匠を種々と工夫する

事はなかつた。しかし平安朝の中期以来、朝廷及び朝臣の間に崇仏の爲、寺塔を建立し、又物故者の冥福を祈る際、仏像や経巻を寺院に寄進することが盛んとなり、写経も相変らず盛行し、それに刊経を添付して奉納する様になつた。既に記した如く生活に餘裕のある人々の信仰が次第に趣味生活と結びついて、写経の供養でも一方ではその数の多いのを貴ぶ餘り摺供養が流行すると同時に他方では、普通の写経では無趣味を感じるに至り、世風の華者と共に經典を写すにも美麗を加うる風を生じて金泥を以てするはまだしも、料紙並びに書写様式及び装幀等に美術的意匠を凝らし、極力莊嚴善美を競う風潮を生じ、かくて所謂繪経・色紙経の流行を見た。即ち榮華物語に治安元年九月廿三日法成寺阿弥陀堂に結縁の経供養が行われ、それが莊嚴経の実状を次の如く記してある。

経の御有さま、えもいはずめでたし、あるはこんじやう（紺青）を地にして、金のでい（泥）してかきたれば金泥の経なりあるは綾のもんにした絵をし、経のかみしにも絵をかき、又経のうちの事ともかきあらはし、湧出品の洄沙の菩薩の湧出し、寿量品の常住靈鷲山の有さま、すべていふべきにあらず、提婆品はかの龍王のいへのかたをかき、あるはしろがね（銀）（こがね（金））のえだにつけ、いひつゞけまねびやるべきかたもなし。経とはみえたまはず、さるべきものゝ集などをかきたらんやうにみえて、このましようめでたうしたり。玉の軸をし、おほかた七宝をもてかざれり。またかうめでたき事みえず経ばこは紫壇のはこにいろ／＼のたまをあやのもんに入れて、こがねのすぢ、をきぐちにせさせ給へり。からのこむちのにしきのこもんなると、おたてにせさせ給へり。あなめでた、おなじくはかやうにてこそ、持経にしたてまつらめとみえたりこれが或は裝飾経の善美を尽した始めてであつたかも知れない。少くともこの作者には初見のものである。〔古写経の鑑賞一 二二頁及日本書誌学の研究〕

二二、刊行年代と初刷後刷

古来東洋諸國で広く行われた木版手刷の印刷では、使用後も版木を保存して置き、必要に応じて入用部分だけ取り出して刷

つた。それで普通には書物の刊行年代は刊記とか、序跋とか、版式とかでこれを明かにすることが出来るが、一般の人々が刊行年代と推定しているのは版木の出来た年代であつて、刷られた年代は版木彫造の年代と一致することもあるが、それより数年または数十年を経過した後である事もある。江戸時代の錦絵などで初刷か後刷か判然と区別出来ないものがあるように普通の版本でも不明の場合がある。版木の出来た年代と刷られた年代との間に、百年とか二百年とかの長年月の隔りがあれば割合に後刷本という見当もつき易いが、版木が出来て継続的に刷られている場合には、初刷か後刷かという事を区別するのは難かしい場合がある。何れにしても早く刷られた分は、刷方・用紙・装幀の三点に於いて優れている。

版木を長年使用又は貯蔵して置くと、文字の磨滅やその一部分が腐朽または虫損の箇所が出来て、補刻を加えなければ使用し得ない事もあり、時として幾枚かの版木が一部紛失欠損することも起る。それで古版本で、文字にカスレがあつて鮮明を欠ぐとか、異なつた字体が挿入されている場合は、古い版木を利用して使い、其際不足の部分の新に彫刻して補つたから、全体としての統一が欠けて来るのである。

円寿寺蔵本中にはかすれて鮮明を欠ぐもの、行のゆがんでいるもの等が幾冊もあるので後刷であることを知ることが出来る。版本の優劣は版木の彫刻・刷方の技術・用紙の選定・装幀の善悪・保存の良否等で決定することが出来る。

二二、武将の經典開版

武人の經典開版は、既に記した如く鎌倉時代に行われ、秋田城介泰盛が高野山に於て、建治・弘安年間に幾多の密教經典を開版し、執権北条時宗が弘安年間鎌倉で円覚了義經を開版するなどのことがあり、南北朝時代に入つてこの風潮は益々盛んとなつた。それは建武以来戦乱が打続いて武人は常に殺傷を事としていたから、經典の開版によつてその罪障を消除しようとしたからである。特に奈良朝以来悔過増益の大聖典として重んぜられた大般若經がしばしば開版せられたのもこの理由によるものである。それで武将中には仏書の刊行と經典の書写に力を入れたものが続出した。前記の外梶原景時が持戒堅固な僧として

大般若經を書写せしめ、鶴岡八幡宮の道場で之が供養を営んで年来の宿願を果したことは吾妻鏡に記するところである。就中曆応二年（一九九九）高師直が罪障消滅の爲めに開版した首楞嚴義疏注十帳、次いで足利尊氏・直義兄弟が教典を刊行したなどの例である。尊氏は吉野・京都と両方に別れて戦争に死んだ将卒の冥福を祈る爲に、一切経書写の大願を起し、願文の中に、後醍醐天皇の菩提を追弔する意味を述べてある。その文は毎経巻の終りに木版で印刷し（本文の経は書写であるが）煩勞を省く爲に自己（尊氏）の署名の二字だけは自筆で書写してある。僅か二字ではあるが、一切経五六千巻に一々自署したのだから仲々の仕事である。

木版印刷した願文は左記の通りである。

発願文

願書ニ藏經ニ功德力 世々生々聞ニ正法ニ

後醍醐院証ニ真常ニ 考妣ニ親成ニ正覺ニ

元弘以後戦亡魂 一切怨親悉超度

四生六通尽沾恩 天下太平民楽業

文和三年甲午歲正月廿二日

征夷大將軍正二位源朝臣（尊氏）自筆 謹誌

尊氏は是を以て後醍醐天皇に対する罪亡ぼしの一としたのである。尊氏はこの外に天皇の旧皇居龜山殿の旧地に大伽藍を越した。是が天龍寺である。（日本書誌学概況一六二頁）

尊氏は此外にも親の貞氏の爲に、観応三年九月五日に写経したものが八巻ある。全部自筆で現に鎌倉円覚寺塔頭の統燈庵にある。それから自分の師匠の三宝院門跡の賢俊が死んで四十九日相当の時に尊氏は般若理趣經一卷を自筆で写して供養している。その宝物は今三宝院にあつて国宝になつてゐる。（日本仏教史の研究）

因みに尊氏が開版した大般若經六百卷並びにその子基氏が文和二年（一三五三）九月廿二日に開版した大般若經は、共に旧鏤板の印摺で全く新しく彫刻した鏤板ではない。（日本古印刷文化史二八六頁）新に鏤板を開彫したものには佐々木氏頼（法号崇永）が願主となり僧勝源が幹縁比丘となつて、広く助縁を募つて開板した大般若經六百卷がある。

前記尊氏が観応三年（一三五二）に刊行した大般若波羅密多經六百卷は刊行関係の人も多かつたと見えて、巻尾に比丘妙道以下十人の名が列ねられその後に

大般若經一部六百卷為三宿願開板畢

観応三年九月十五日正二位源朝臣尊氏

と署名してある（版にて）

この尊氏の願經の後に前に記した如くその第四子基氏が大般若經を開板した外に第三子義詮が延文二年（一三五七）に開板している。共に父を助けて吉野方と連戦し之をなやました者であるがその叛逆の罪を償う志があつたのでいづれも

為三宿願開板畢の短い跋を記して居る。

以上は滅罪懺悔の為少くとも自己慰安の為に刊書を行つた適例であるが、応安七年（一三七四）比丘永清開板の大般若波羅密多經は仏典刊行を善意を以てした例である。（全前一九九頁）

二三、經文の社前読誦

日本の歴史的の信仰によると神社で仏教の經文を読誦して祈願したり、祈誓したりすることは常例であつた。それが江戸幕府時代に神儒仏の三道と云われた国民の精神的指導原理が分裂して對抗する状が現われ、遂に明治時代の初め、神儒の二道から仏教が排撃せられ、仏教の歴史的文化的の精神的方面が否認せらるることとなり、殊に神仏混淆と云うことが嫌忌せられたので、漸次こうした社前での読誦は蔭をひそめた。

楠正成は法華經の靈驗を仰いで神社の宝前で祈誓した。それは彼の至誠純真な信仰で、その奥書の前段は、法華經の功德を説き、後段には天下が静謐になり祈願が成就すれば、毎日神社の宝前で、法華經の一品を転読することとしたから、今新一部を書写して転読用に供用することになったとある。当時の例によれば祈願せられた正成公は、読経料を納めて神社に奉仕している法侶が転読したのである。

肥後の菊地武頭は正平十九年（一三六四）十二月発願して、肥前の河上社の宝前で毎月大般若經一部を転読して国家の安穩を祈禱させた。そしてその読経料を納めて法侶が転読した。

かくて徳川時代の末期まで各社寺共こうした行事が行われたので経本が所蔵されていたが、明治維新の神仏分離で神社では仏教関係のものは殆んど廃棄処分にした。石清水八幡宮ではその時極めて多数の仏教関係の圖像経巻などを、悉く搬出し売却したと故鷲尾順敬氏は其著に書いてある。（日本仏教文化史研究一六七頁）大分市もと国幣小社杵原八幡宮なども同様に多数し経巻は経堂と共に杵築市の某寺に払い下げた。

二四、徳川時代刊行の二大蔵一切経

1. 天 海 版

文禄年間に我が国には新しく活字印刷が入つて来た。それは朝鮮系と南蛮系との二様式である。これによつて慶長・元和・寛永を通じて四十年間ばかり活字版全盛の時代を実現した。その中最も大規模のものとしては慶長十八年（一六一三）常明寺宗存に依つて活字版大蔵經の開版が計劃され、その事業が途中で挫折すると、天海が更に寛永十四年（一六三七）三月、幕府の援助を受けてこの事業に着手し、十二年の歳月を費して慶安元年（一六四八）四月全部を完成した。六千三百二十三巻という大部の典籍を木活字で印刷した例は他に多く見ない。

天海は徳川家康に侍座した上野東叡山の開祖で慈眼大師の謚号がある。彼は畢生の宿願であつた大蔵一切経の開版をその晩

年に着手し、その死後その遺志をついだ弟子達が完成した。その天海本にも武蔵版・天海版・天台版の各種がある。

2. 鉄眼版

天海版に続いて京都宇治の黄檗派の僧鉄眼が一切経の開板を発願し寛文九年（一六六九）より天和元年（一六八一）に至る十三年後に完成を見た鉄眼版に就ては元の小学国定教科書にも出ていたので知る人が多い。この整板（木版）は今も寺に保存されている。

この鉄眼本もその出版場所と年代等によつて鉄眼版・黄檗版・宇治版の別がある。

因みに鉄眼は熊本人で我が玖珠郡森藩主久留島侯はこの開板に多大の援助をしている。前述したように梶下西国東の富貴寺や三重内山の蓮城寺等の一切経は鉄眼版で、その以前の版経は梶下には殆んど見当らない。

二五、大般若経刊行略史

1. 大般若波羅密多経

六百卷 自貞応二年（一二二二）
至嘉録二年（一二二七） 刊大和 法隆寺
律宗戒学院 蔵

卷末刊記

（卷第三十四）為先師成遍出離解脱門弟合力、敬奉彫当卷摸畢

千時嘉祿三年 丁亥 二月九日 釈永全記之

（卷第三十五）為先考寺僧晴範十三年報恩奉彫之

嘉祿二年 丙 二月三日 栄蒙等

(卷第四十六) 相当沙弥政阿弥陀仏十三年周忌、奉彫供養親父安陪時資

嘉祿元年 乙 九月一日 西

(卷第五十三) 奉為慶円上人滅罪生、生善彫刻当奉瞻彼菩薩矣

貞応二年三月二十九日 仏子貞栄

(卷第一百) 願以此善普及自他生々世々開発智慧修学仏法展転教授為世燈明五十七億六万歳間見仏聞法因縁純熟大聖慈尊成道之時親近奉仕發菩提心塵殺之中修習般若四恩

2. 法界同証仏道

嘉祿三年 丁 三月廿六日当慈父一週忌辰奉彫当卷畢 釈範真敬白

(第五百九十八) 願此刻彫、功德善根、三宝哀愍、随逐護念、身心無病、諸根明利、恒利勇猛、修習六度、念念増進、速至不退、決定当証、無上菩提 僧 猷賢

3. 大般若波羅密多經

卷第二百七十七 一卷 弘安二年(一二七九)以前刊 奈良 西大寺藏

卷末墨書

弘安二年 己 卯 三月廿五日為 聖朝安穩仏法久住於平岡宝前供養既畢 永安置社壇鎮可奉責法案矣 願主西大寺 沙門 叡尊

4. 大般若波羅密多經 六百卷

觀應三年（一三五二）摺写 古經題跋所載

卷末刊記

大般若經一部 六百卷

為写宿願開板畢觀應三年九月十五日 正二位 源朝臣尊氏

5. 大般若波羅密多經 六百卷

比丘尼妙道 尼藤原如鸞 源氏女

平朝臣氏胤 妙弥經阿 清原熊犬丸

妙弥行阿 平氏性如 妙弥道阿

清原慶里丸

大般若經一部六百卷為写願開板畢

觀應三年（一三五二）九月十五日 正二位 源朝臣 尊氏

6. 大般若波羅密多經

卷第十五 文和二年（一三五三）摺写 宮内省圖書寮藏

卷末刊記

參議左近衛中將源義詮 源氏如春

大般若經一部 六百卷

為宿願開板畢 文和二年九月廿二日 左馬頭 源基氏

大般若波羅密多經 六百卷 日本古刻書史

為宿願開板畢 延文二年(一三五七)十一月二十一日

參議左近衛權中將 源 義詮 源氏女 如春

註 文和二年は基氏が義詮並に如春の爲めに開版したのを誤り伝へたのではないかとも思はれる。それで日本古刻書史が何によつて右の跡文を採録したか不明、なほよく調査研究の必要があると日本古印刷文化史には書いてある。

7. 大般若波羅密多經

六百帳 応安七年(一三七四)刊 奈良 律宗戒学院藏

卷末刊記

(第二百十一卷) 開板願主禪忠

(第二百五十二卷) 此帙者実円勸進開版之

(第三百七卷) 洛之慧峯正統菴大般若印板四百内焉比丘永清発誠心而仕有力命工統造矣、宜哉印文打就衆人摸写以茲功勳
普利恩有者也、曆応安甲寅仲秋日

幹縁比丘永清造之

(第三百十五卷) 成正正四位下行左京大夫

(第三百十六卷) 大中臣朝臣行広

(条三百五十六、三百五十八、三百六十卷) 左衛門頭平忠

8. 大般若波羅密多經

卷第二百九十七 永和二年（一三七六）刊 日本古刻書史所藏

卷末刊記

永和二年丙辰五月 日 化縁比丘智感

9. 大般若波羅密多經

卷第六百 康曆元年（一三七九）刊 東京 久原文庫藏

卷末刊記

此經板喜捨施入江州佐々木新八幡宮專為上酬四恩下資三有無辺法界廣大流通者

康曆元年己未八月七日 幹縁比丘勝源

願主当国太守菩薩戒 弟子 崇永

註 此の大般若には佐々木氏頼が願主となり僧勝源が幹縁比丘となつて広く助縁を募つて開版したもので、氏頼は応安三年（一二七〇）六月三十五歳で卒しているので、その完成は彼の歿後風そ十年を経過した康曆元年八月のことである。

なお此の大般若波羅密多經第六百の前に「開板比丘尼義選」とある。これは幹縁比丘勝源の募縁に應じて第六百卷の開雕の費用を喜捨したことを示したもので、

第二三六卷、第三〇四卷、第三〇五卷、第三〇六卷、第三〇六卷、第三五一卷 沙弥照禪

開板 蓮性 源 満房

第三五三卷、第三五五卷、第三五六卷

尾張守源義満 左衛門尉源則光 開板源康春 などあるのも同様である。

10. 大般若波羅密多經

卷第四百二十 一帳 至徳元年（一三八四）刊 京都 久原文庫蔵
卷末刊記

至徳改元七月 日 化縁比丘 智感

11. 大般若波羅密多經

（模板） 曆応、康永、貞和、観応、文和、延文、康安、貞治、応安、永和、康暦、永徳、至徳、康応、明徳刊奈良興福寺
陰刻銘

（初百内五帙一卷五） 貞治六末三月卅日

観舞房

ノサ夕

（初百内八帙一卷五） 康暦元年十一月 日

（初百内八帙五卷七） 永徳元年六月廿日

（初百内五帙九卷四） 永徳四年四月十日

（初百内九帙六卷一） 明徳三年六月廿日

（初百内七帙四卷八） 明徳三年七月十日

（初百内七帙三卷五） 応安二年八月 久弘 胤玄

（初百内九帙八卷七） 至徳三年三月廿日 奉行

（初百内四帙七卷三） 永和元年五月 日

（初百内十帙三卷五） 永徳三年正月卅日

- (初百内十帙九卷四) 至德二年 ウシノ 十二月 日
- (初百内六帙四卷一) 明徳三年八月 日
- (初百内五帙四卷) 明徳三年八月十日
- (初百内五帙十卷四) 貞治二年十一月 日久弘
- (初百内五帙一卷七) 貞治六年十一月廿日重禪得一
- (初百内三帙一卷六) 至徳元年八月廿日
- (初百内一帙一卷六) 応安七年十二月廿日
- (二百内十帙十卷一) 康安二年五月八日
- (二百内八帙四卷四) 貞治六年八月 日久弘
- (二百内六帙二卷五) 永和元年五月七日
- (二百内五帙五卷一) 明徳三年 壬申 十月廿日
- (二百内四帙四卷五) 明徳四年 癸酉 月 日
- (二百内三帙三卷三) 明徳四年 癸酉 七月八日
- (二百内八帙一卷六) 貞治二ウ九月卅日
- (二百内十帙十卷三) 応安七年二月 日 五枚之内
- (二百内二帙九卷三) 康安二年二月 日 中御門永尊
- (二百内五帙七卷二) 康暦二年十二月 日
- (二百内七帙七卷三) 明徳二年十月廿日
- (二百内三帙六卷一) 明徳四年六月卅日

明徳四年^{癸酉}十月廿日

(二百内四帙九卷七)
康永二年七月九日

(二百内五帙九卷六)
永徳元年六月廿日

(二百内六帙十卷五)
貞治二ウ十一月十日

(三百内八帙三卷三)
永徳三年十二月卅日

(三百内五帙一卷)
貞和二年十月 日

(三百内一帙十卷四)
貞和二年十二月 日

(三百内五帙五卷一)
貞治六年正月 日

(三百内三帙九卷二)
貞治六年十月十日

(三百内七帙二卷七)
貞治六年三月廿日

(三百内五帙四卷一)
貞和三年二月 日

(三百内四帙八卷五)
康暦元年六月 日

(三百内十帙五卷四)
貞治二年十一月晦日

(三百内七帙二卷三)
応安六年六月廿日

(三百内三帙一卷二)
延文二年六月十三日

(三百内八帙五卷六)
貞和五年五月十五日

(三百内一帙三卷一)
永和二年二月 日順

(三百内七帙六卷二)
貞和二年八月 日

(三百内一帙十卷八)
貞治七年正月廿日順

(三百内九帙六卷六)

- (三百内四帙五卷二) 至德四年五月 日
- (三百内一帙十卷八) 貞和二年八月 日
- (三百内八帙五卷三) 貞治二年十一月十日
- (三百内六帙七卷七) 貞治二卯十二月十日
- (三百内六帙八卷三) 貞治六未五月卅日
- (三百内六帙三卷一) 康徳元年十月廿日
- (三百内十帙四卷一) 貞和三年四月 日
- (三百内二帙五卷八) 明徳元年十二月卅日
- (三百内五帙六卷三) 延文三年三月六日
- (三百内五帙四卷一) 永和二年五月十日
- (三百内七帙八卷二) 永和五年午五月九日
- (三百内八帙九卷一) 曆応五年五月 日
- (三百内十帙二卷一) 貞和二年九月 日
- (三百内八帙四卷五) 曆応五年四月 日
- (三百内四帙一卷七) 延文二年九月十日
- (三百内九帙九卷三) 貞和五年六月廿五日
- (三百内三帙四卷七) 貞治七申正月十日
- (三百内九帙九卷二) 永和二年六月廿日
- (三百内七帙一卷二) 永徳二年五月十日

- (三百内七帙九卷六) 観応元年十月七日
- (三百内七帙一卷二) 永徳二年五月十日
- (三百内九帙八卷五) 明徳二年十月廿日
- (三百内十帙六卷五) 貞治六年卯月卅日
- (三百内九帙四卷六) 貞治二年十二月十日
- (三百内八帙五卷二) 応安二イ又五月廿九日
- (四百内四帙八卷八) 貞和三年十月 日
- (四百内八帙三卷二) 貞治三年六月十日
- (四百内三帙二卷二) 応安六年六月廿日
- (四百内二帙七卷八) 延文五年九月五日
- (四百内五帙八卷八) 貞治三曆四月廿日
- (四百内二帙十卷) 康安二年七月四日重
- (四百内八帙八卷八上) 貞治三曆二月廿日
- (四百内五帙七卷四) 応安七年トラ七月十日
- (四百内一帙八卷六) 延文元年五月十八日
- (四百内一帙十卷八) 貞治三辰六月十日
- (四百内八帙九卷八) 貞和四年十月卅日
- (四百内十帙十卷四) 永和三年四月 日
- (四百内十帙九卷三) 応安六丑十一月卅日

- (四百内八帙六卷八)
- (四百内五帙八卷七)
- (四百内四帙三卷八)
- (四百内六帙五卷一)
- (四百内三帙二卷八)
- (四百内九帙六卷一)
- (四百内四帙二卷八)
- (四百内三帙一卷二)
- (四百内二帙六卷四)
- (四百内五帙一卷二)
- (四百内五帙六卷五)
- (五百内三帙五卷三)
- (五百内九帙二卷六)
- (五百内六帙六卷三)
- (五百内二帙三卷五)
- (五百内一帙七卷五)
- (五百内七帙四卷五)
- (五百内七帙五卷八)
- (五百内二帙八卷四)

応安七年寅十月十日

貞治三曆三月卅日

貞治三曆五月卅日

貞和二年十一月 日

貞和二年三月 日

文和四年八月三日

延文二年五月廿日

明德元年午三月晦日

貞和四年二月 日

至徳元年十月廿日

永和三 丁 十月 日

貞治四年五月十日順

応安六年丑十一月廿日

応安三 申 六月廿日

応安子五月卅日

延文五年十二月廿二日

永和二年十二月八日中院内大式

永和元年九月日順

貞治 二 年六月十日

ハスハラ
サタ信

(五百内一帙五卷一)

貞治四年巳十一月日久弘

(五百内八帙五卷四)

永和元年卯四月十日

(五百内十帙五卷三)

永和元年四月廿日

(五百内十帙三卷七)

永和元年九月 日順

(五百内七帙六卷一)

永和二年六月卅日

(五百内八帙十卷三)

永和元年四月十日

(五百内七帙六卷四)

応安七年八月十日

(五百内十帙六卷五)

応安八年卯三月廿日

(五百内四帙五卷八)

貞治三年六月十日
シムツイ
ノ分

(五百内八帙八卷八)

康永元年十一月日永重

(五百内二帙三卷〇)

延文二年十二月四日

(五百内八帙四卷一)

文和四年八月十日

(五百内十帙八卷八)

応安八年三月廿日

(五百内三帙三卷二)

文和三年十一月五日

(五百内八帙八卷四)

応安六丑十月卅日

(五百内十帙五卷七)

貞治二巳 四月廿日

(六百内九帙二卷一)

永和元年七月十二日大成

(六百内二帙二卷八)

永和四年九月十日

(六百内八帙六卷五)

応安七年八月 日

(六百内六帙六卷七)

応安四年十一月十日

(六百内八帙七卷三)

甲院ノ分
応安六年丑五月
五枚ノ内

(六百内二帙十卷八)

康曆二年申九月十日

(六百内一帙八卷八)

永和五卅三月 日

(六百内八帙三卷二)

永和三年九月十三日伊

(六百内五帙一卷一)

永和元年十一月廿日

(六百内八帙三卷七)

貞治^二 巳八月卅日

(六百内九帙十卷七)

貞治^二 巳十月廿日

(六百内四帙八卷一)

康曆二年甲九月十日

(六百内三帙二卷一)

五枚之
内中院
応安七年五月分

(六百内八帙五 六)

中御門大貳
応安七年十月分

(六百内二帙十卷五)

応安三戌十二月十一日

(六百内三帙九卷一)

永和四年七月六日

(六百内三帙三卷八)

永和四年九月十日

(六百内十帙一卷一)

康曆二年八月廿九日

12. 大般若波羅密多經

卷第四百三十二 応永四年(一三九七)刊 京都 久原文庫蔵

卷末刊記

応永四年二月 日 化縁比丘法龜

13. 大般若波羅密多經

(模板) 応永、永享
宝徳、康正 刊 奈良 興福寺藏

陰 刻 録

(初百内七帙七卷一) 応永十三年九月廿三日

(二百内八帙五卷三) 応永十陸年九月漆日重円

(二百内三帙五卷八) 応永十六年十一月十八日

(二百内三帙四卷八) 応永十八年二月廿四日

(二百内三帙一卷八) 応永廿五年二月 日

(二百内七帙十卷一) 応永^二_一四月 日

(二百内二帙十卷六) 応永十亥正月 日

(二百内二帙十卷五) 応永十四年十二月 日

(二百内二帙十卷三) 応永十五年十一月 日

(三百内六帙七卷六) 応永廿七年四月六日

(三百内五帙六卷二) 応永己四月三日

(三百内八帙五卷四) 応永二年五月廿日

(三百内七帙三卷二) 応永十八年十月 日

(三百内八帙七卷八) 応永十九年四月 日

- (三百内四帙六卷六) 応永七寅五月廿日
- (三百内六帙二卷六) 宝徳二年三月 日
- (三百内六帙四卷十) 応永廿五年十二月八日
- (四百内七帙三卷八) 応永五年七月十日
- (四百内六帙二卷一) 応永十三年七月 日
- (四百内八帙三卷八) 応永廿五年十一月 日
- (四百内八帙八卷一) 応永廿六年十二月 日
- (四百内六帙六卷八) 応永四年十二月 日
- (四百内五帙三卷一) 応永十二年四月 日
- (四百内一帙九卷一) 応永十二年七月 日
- (四百内一帙九卷五) 康正元年十一月 日
- (四百内□帙□卷□) 康正三年三月 日
- (四百内五帙三卷八) 応永廿二年正月 日
- (五百内三帙七卷一) 応永廿九年 壬寅 九月廿一日順榮
- (五百内八帙九卷八) 応永十一年十二月
- (五百内八帙七卷九) 応永五年九月 日
- (五百内二帙二卷二) 応永八年十月 日
- (五百内□帙□卷□) 応永九年二月 日
- (六百内十帙一卷四) 応永七年正月十三日

五枚之内
中衛門分

(六百内十帙八卷八)

応永八年二月 日

(六百内六帙九卷一)

応永十二年正月 日

(六百内六帙五卷三)

応永廿三年十一月 日

(六百内五帙六卷八)

応永廿六年六月 日

(六百内一帙三卷五)

応永廿六年六月十五日

(六百内八帙一卷三)

永享二年九月八日

乙、本論Ⅱ大般若経円寿寺本に就て

一、円寿寺本の由来

1. 大友吉統の文書

円寿寺所蔵古文書中に左の大友吉統文書がある。(写真版①)

為唐入祈禱、大般若経従豊前国、以調法令寄進候、別而可被抽懇祈事、頼敷候、不可有御油断之儀候 恐々謹言

二月廿三日

吉 統 (花押)

円寿寺殿

これは唐入祈禱の為、即ち大友吉統が朝鮮出征の武運長久祈禱の為め大般若経を豊前の国から調伏の呪法(心と身を調和して諸悪行を制伏すること)を以て寄進した。それでわけて懇に祈ることを一層叮嚀にとり行う様お頼みする。祈禱を特別深重にするのだから気をゆるして不注意のことがあつてはならない。(十二分に注意して取り行なえ)という意である。

東京大学出版部昭和二十八年三月三十日発行、東大史料編纂所編、史料綜覧卷十二の三四五頁に左の如く記載されている。
文祿元年正月、是月

大友吉統、豊後円寿寺ニ大般若経ヲ納ム（豊後旧記）

2. 佐田善神王宮の納経

A、巻頭書き入れ—佐田善神王宮

この吉統が豊前の国から円寿寺に移入した大般若経は現在同寺に所蔵しているものである（図版③）ことは以下述ぶる巻頭記入書其他で知ることが出来る。

記入例（図版④）

- (1) 佐田善神王宮 (2) 佐田善神王前 (3) 豊前州宇佐郡・佐田善神王前（二行書） (4) 佐田善神王宮 (5) 佐田善神王 (6) 善神王宮
(7) 佐田庄、善神王宮 (8) 佐田村善神王宮 (9) 佐田庄、善神王宮置之 (10) 九州豊前州宇佐郡佐田庄、善神王宮前 (11) 豊之前宇
佐郡之内、佐田庄善神王宮 (12) 佐田村、善神王社捨置之 (13) 佐田庄、善神王社捨置之 (14) 佐田之靈廟、善神王宮捨置之 (15) 佐田
村、善神王廟捨置之 (16) 佐田村、善神王廟捨置之 (17) 佐田善神王宮捨置之 (18) 佐田善神王宮置之 (19) 大日本西海道豊之
前州宇佐郡佐田庄、善神王 (20) 大日本西海道前豊城宇佐郡佐田庄善神王宮 (21) 奉捨入佐田善神王殿前 (22) 西海道豊前州宇
佐郡佐田庄善神王宮 (23) 大日本国九州前豊城宇佐郡佐田庄、善神王捨置之 (24) 鎮護善神王宮、奉捨入者也（以下省略）
但第三十卷、第三百二十卷等の如くまれに記入なきものが何巻かある。

右の如く殆んど各巻頭に宇佐郡佐田庄善神王宮奉納のことが記入されているが、この佐田庄は現宇佐郡安心院町内でもとの佐田村である。そしてこの善神王宮は同地の鎮守として現存している。大隈米陽氏著豊前国佐田郷土史上卷には次の如く書いてある。

本宮は今は佐田神社と称せられているが、古来善神王と称へ奉り、大字佐田字宮ノ台の小丘巨松老樹蔚乎たる靈域に在る。蒼古にして幽邃、佐田郷の御鎮守として古来より村民の尊崇が極めて篤い。今の祭神は武内宿禰・素盞鳴男尊・大山祇命三柱で、境内に小一郎靈・菅原神・宇都宮大明神其他が合祀されている。縁起を案ずるに「佐田本記」に曰く、太守左近將監源能直公御再興、正中二年、安心院殿御再興、文正年中、宇都宮大和守殿御再興、文龜三年再び検断により再興、御代官大藏大輔殿再興（賀米大藏乎）云々とあり。明治五年郷社に列せられた。（図版(2)）

B 善神王宮奉納者

殆んどの各卷末に次の如く奉納者たる大壇那昌佐のことが世話人たる、龍潭・玄与と共に書入れてある。その記述表現には多少の相違あるが、大壇那・本願・奉行共何れもそれぞれ同一人である。

(一) 大壇那藤原沙弥昌佐
本願 龍潭弥典座
芽庵玄誉

(二) 旦那沙弥昌佐
本願 沙門龍潭
奉行 积子芳菴

(三) 大壇越藤姓沙弥昌佐
本願 龍潭
奉行 芳庵

(四) 大壇越藤氏沙弥昌佐
本願 龍潭
奉行 玄誉

(五) 大壇越藤原沙弥昌佐
本願 沙門龍潭
奉行 比丘芳誉

(六) 大壇越藤原昌佐
本願 龍潭上人
奉行 芳菴道人

(七) 大壇那藤原朝臣沙弥昌佐
本願 道人沙門龍潭
奉行 宝積玄誉

(八) 大壇越藤原朝臣沙弥昌佐
本願 比丘龍潭
奉行 比丘芳菴誉

(九) 大壇越藤原朝臣沙弥昌佐
本願 沙門龍潭弥典座
奉行 比丘宝積住持芳庵玄与……………（以下省略）

C、昌佐の系譜

大織冠鎌足——(中略)——宗綱——(中略)——信房——西国宇都宮流之祖——(中略)——通房——正応三年十月
豊前国城井郷宇都宮大明神是也——(中略)——賜佐田庄地頭職

經景

河内守、宇都宮大膳亮、或因幡大膳亮宅地居城并

貞治二年(一一六三)正月十八日依探題斯波氏經之命、退治安心院美濃守以下兇徒、同年五月二日給義詮之御内書、同三年正月十日、為豊前国平田宮林台戰賞、給氏經之感狀、応安三年(一一七二)十二月六日、於京給義滿之御報書、此時今川了俊、補九州探題、將出京不果、同四年八月了俊下於九州、經景陪駕、永和元年十月、於筑前国山崎戰死

親景

小法師丸、河内小法師、因幡二郎宇都宮掃部助

薩摩守、法名昌節佐田之称号始於此宅、地字佐那深見庄下岩迫下同、永和元年十月廿五日、了俊投書賞經景之戰死、同四年五月十七日賜義滿之御教書、康曆元年(一一七九)八月十一日以祖父公景之讓狀、統父繼景之遺領、永徳三年(一一八三)四月十五日元服、此時大友親世授名字、曰因幡二郎親景、応永七年九月十日、賜義持之御教書、加領同国下毛郡之内、同十一年八月九日、賜管領義重書、退治少式入道本仏、又加領同築城郡牛丸名、永享七年(一一四五)三月三日、以本領屬盛景授讓狀、

成景

掃部助、因幡守、法名昌佐、嘉吉元年(一一四四)

二月 日嘉賴攻大内教弘、此時盛景救教弘有功、依之同十月五日、管領持之授感狀、文正元年(一一四六)四月五日、以本領屬忠景授讓狀、

忠景

又二郎掃部允、因幡守、文正元年(一一四六)四月賜大内政弘之書、文明八年(一一四七)六月、對馬岳、岩右凶徒、

此時賜義尚之感狀、長享元年(一一四八)十一月七日、以本領屬俊景授讓狀

俊景

二郎源正忠、長享二年(一一四八)七月八日、賜政弘之書、明応五年(一一四九)十二月十一日、賜義興之御教書

加領宇佐郡三個別納三十八町及屋敷十三所之地、同七年八月、以本領屬泰景、先是延徳三年(一一四九)五月二十二日授讓狀、

泰景

小法師丸、二郎、大膳亮、因幡守、宅地宇佐郡佐田庄、下同、

明応七年(一一四九)十月二日、大友親治之兵乱入佐田庄、俊景、泰景、拋菩提寺防之、同十三日、得大内義興之援兵、退凶徒、同八年冬、凶徒又入郡中、泰景以秘策退之、依之十一月廿二日、賜義興之感書、大永五年(一一五二)十一月十七日、以本領屬摘孫朝景授讓狀

某一朝景一隆居

彈正忠、薩摩守、法名麟珠、天文廿一年

(一一五二)六月五日賜大内義長文書、此日又加賜上津布佐百石地、同廿四年(一一五五)五月廿

五日又加賜向野郷草弁分二町七反余地、弘活二年（一五五六）六月、入筑前同討秋丹党、此日賜義長之書數通、同三年夏秋之間、退治山田、仲八屋、及秋月、筑紫等、此時賜大友義鎮之感書數通、永祿二年（一五五九）秋冬之間於企救、田川兩郡之内、討西郷遠江守、波多野大和守、野中十郎以下之凶徒、此時又賜義鎮之感書數通、同八年（一五六五）十一月三日、宗麟為勲功之賞加賜豐筑之間五拾町地、元龜三年（一五七二）以本領屬鎮綱

鎮綱

二郎彈正忠因幡守、元龜三年（一五七二）閏正月十三日、

賜宗麟之書、同十一年（一五八〇）三月廿四日、討麻生撰津守、皆賜宗麟之感書、天正六年（一五七八）三月、隨田原紹忍日向州、同四月十日、拔土持相摸守之松尾城斬首六、此時又賜大友義統之感書、且被免佐田庄檢斷點役新儀等、同八年（一五八〇）十二月廿四日賜宗麟之書、加領下津布佐四拾町地、又加賜敷田宮隈地、同十一年（一五八三）、閏正月麟珠鎮綱與田原紹忍共攻心院中務神樂城、安心院千代松為降人、此町宗麟父子之賜感書、同十四年薩兵入豊州十月十二日以田原親盛及鎮綱為高岩、城番、同十二月六日、以本領統綱讓系長文書曰、天正八年十二月宇佐郡辛島之内德弘名八下佐田彈正忠、先判之地無紛之条云々、天保三年（一八三二）九月豊前佐田住人加來佐一郎來書曰、鎮綱後與三郎右衛門改名、墓所ハ在周防、又曰、佐二郎祖賀來惟綱妻鎮綱之女也、

統景

二郎五郎在左衛門、始統綱、永祿七年生、

天正六年十二月廿三日元服、大友義統賜一字、同十四年十一月廿八日承嗣、十五年春、豊太閤親征九州平定、夏六月、裁地封諸侯、大友氏豊後、黒田氏賜豊前、於是統景去佐田庄、寄食豊後、文祿元年（一五九二）、豊太閤征朝鮮、大友氏与諸將航海、赴朝鮮、統景從之、明年大友氏有故國除、家亡矣、統景出豊後入豊前、託黒田氏、慶長五年（一六〇〇）黒田氏移封于筑前也、我、松向公來、就封于豊前統景及武員奉仕有年、元和元年（一六一五）九月統景賜三百石之地、是年加賀山次左衛門有罪、公命田中兵庫、松山權兵衛、及統景誅之、兵庫、權兵衛、捕次左衛門、統景刃之、七年為郡奉行、寛永五年（一六二八）四月病卒、嫡子、武員承嗣、寛永五年（一六二八）四月某日逝、距今嘉永五年（一八五二）二百二十拾五年、忌日法号未詳、因今候以四月三日、為忌日、且追贈法号本立院宗水日治

武員

吉左衛門、於豊前賜二百石之地、大阪之役

我軍發豊前、武員從之、元和七年為大阪銀子奉行、寛永五年（一六二八）妙解公奉台命修大阪城石垣、長岡監物以下之諸士、各屬役、武員從之、七年某月某月（九月廿九日？）卒、法号一乘院宗印嫡子宗琢承嗣

宗琢

長三郎市郎左衛門、寛永九年（一六三二）從細川忠利

遷肥後熊本、明年七月賜百五拾石也、慶安四年（一六五二）八月十七日死、寿仙院宗琢

宗勝（以下省略）

D、佐田家系之事

豊前因佐田の住人、佐田彈正忠鎮綱ハ代々住佐田、領近郷、其先下野国宇都宮弥三郎朝綱也、朝綱ハ大職冠鎌足公ヨリ十二代、粟田関白道兼公ヨリ五代之後胤也。

其子孫下当国、住佐田え亘不詳、佐田薩摩守公景ヲ始祖トス、以佐田為家号、紋リ藤左巴也、公景ノ子薩摩守恒景、其子薩摩守親景、其子因幡守盛景、其子因幡守忠景、其子彈正忠俊後景、其子因幡守泰景、其子因幡守武為、其子薩摩守隆居、其子彈正忠鎮綱ト相統ス、泰景、武為、隆居ハ中国大内家ニ属ス、其頃豊前ハ皆大内ノ領タリ、大内泯滅之後豊前ノ国士皆蝸牛角上之争ヲナス、宇佐郡ニ廿六人ノ士有、往古ヨリ公方ノ地ヲ食シ居タリ。
佐田薩摩守隆居モ其一人也
世々宇佐宮ノ武宮タリ

弘治二年（一五五六）秋九月豊後国王、大友左衛門督義鎮、入道宗麟豊前ニ打入り龍王ニ在陣ス、從是佐田隆居大友家ニ属ス。
豊前宇佐郡ノ士、
廿六人悉属大友氏、天正之比佐田彈正忠鎮綱、門司、立花、日州合戦ニ大ニ軍功有テ伝来ノ食地ニ其賞ヲ合百三十余町也。

感状等不知其員、
佐田庄八十町、津房四十町、
其外十余町ノ菜地タリ

天正十五年（一五八七）三月太閤秀吉九州御下向有、九国平夷之後、大友豊後侍從義統エ本知豊後国一國ヲ宛行レ、豊前八郡ノ内企救、田川二郡ヲ毛利尙岐守勝信ニ賜リ、小倉ニ居シ字佐、上毛、下毛、築城、仲津、京都ノ六郡ヲ黒田官兵衛孝高ニ賜リ、仲津川ニ在城ス、因之、当国ノ国侍皆流浪ス、佐田鎮綱大友家ニ訴訟アリ

「義統朝臣ヨリ黒官（孝高也）申談候ハン、若違變ノ時ハ於当國中ニ百貫分其志ヲ顕スベキトノ御書有」

其後大友屋形モ退転シヌ、佐田彈正忠鎮綱ハ佐田ノ田尾ト云所ニ有シガ、豊前国エ細川公御入国有テ後、小倉ニ奉仕ス、

細川侯肥後エ御国替有テ鎮綱子孫熊本ニ有之、其一族佐田庄内河野邑ニ有之、佐田越後守泰綱、其子内記光繩代々内河野邑食地ナリ、此内記大友日州合戦之時、天正六丙寅（一五七八）十一月十二日、於耳川戦死ス、廿五歳也、其子孫右衛門綱友時ニ七歳ナリ、其子喜助友久、後勘左衛門ト云、此時佐田彈正忠鎮綱、細川公ニ奉仕也、弥右衛門父子浪人ト成テ内河野ニ耕

ス、此時小倉ヨリ佐田鎮綱ノ庶子小共衛鎮忠ト云、人ヲ遣サレシ当地山中ト云所ニ居住有、盛山眼雪居士（鎮忠法名）承応二年（一六五三）十二月十五日、友久ハ小倉（泰雲院）御代寛永ノ頃ヨリ内河野莊官仰付ラレ、代々莊官相勤候、友久（入道シテ一入ト云）子友房、其子友治、此友治莊官相勤（延宝五年一六七七）之時、佐田村太郎右衛門ト申ス者ト各（名カ）字ノ莫ニ付爭論シ、肥後ニ通達有リ
山藏邑賀来庄右衛門罷越候事、此時一人尚在命シテ有リ
 （以下省略）肥後国託摩郡九品寺村佐田庄三郎藏、東大史料編纂所写本

（統編年大友史料十所載）

E、龍潭と玄譽

本願の龍潭、奉行の芳菴玄譽に就ては調査未詳、佐田居住郷土史家大隈米陽氏にも問い合せたが不明、何れにしても佐田庄か其附近の天台か禪宗の僧侶ではあるまいか。

註

沙弥（仏）息慈、勤策男または求寂の意）仏門に入り剃髪して得度式を終つたばかりの修業未熟の小僧、さみ、

沙門（梵語勤息即ち善を勤め勤を息むる人の意）出家して仏門に入り、道を修める人、僧侶、桑門、出家、さもん。

釈子（釈迦の子弟、仏弟子、僧侶、仏徒

典座（禪家で衆僧の臥具食事などの事を供る僧、てんぞ。

釈氏（釈迦、釈門、仏家、仏氏、僧侶

本願（①本来のねがい、もとのねがい。②仏の、仏菩薩が過去世において発起した誓願、本誓、③本願主の略

奉行（①上の命を奉じて事を行うこと。またその人、②武家時代の職名。上命を受けて事務を担当した或一局部の長官。鎌倉室町時代まで

は評定衆、引付衆の称。桃山時代では大老の下の参政の職。江戸時代では勘定奉行、寺社奉行、町奉行などの類、

上人（仏）智徳を具備し専念仏道を修する僧、②僧侶の名、法橋上人位、③僧位の教称天台宗及其の分派の時宗、浄土宗、日蓮宗で云。

F、吉統の納経と佐田統景

本円寿寺大般若経は寛正四年（一四六三）に佐田郷の地頭であつた佐田昌佐が鎮守の佐田善神王宮に寄進したものであることは記入の記事によつて今更疑う余地はない。当時佐田庄は大内領下で勿論昌佐は大内氏に属していたが其後大友領となつた然して之を吉統が円寿寺に移入したのは文禄元年（一五九二）で、秀吉の島津征伐の天正十五年（一五八七）後は豊前一円黒田領となつたので、当時の佐田統景は豊前の佐田を去り豊後に寄食していた。従つて文禄元年の朝鮮征伐に吉統出征の際には豊後在住から従軍したことになる。（系図）とすれば吉統が大般若経円寿寺移入には佐田統景が進言して実現したのではないかと思う。勿論当時此種大般若は余り多くなく相当有名なものであつたのであろう。何れにしてもこの大般若円寿寺献納に統景が関連ないとは云えない。

因みに当時の円寿寺住職は寛全法印であつた。

G、善神王宮奉納年月記載形式

佐田昌佐が善神王宮に大般若経を奉納した年次は殆んど各巻末に左記の形式で年月日記入があるので奉納は寛正四年（一四六三）二月十五日であることが確認出来る。（図版(5)）

(1) 豈寛正 一、二
二末 二月十五日

(2) 干時寛正 二
二末 二月十五日

(3) 千時寛正 二二年二月十五日

(4) 寛癸 二月十五日

(5) 寛正 二二年二月十五日

(6) 寛正 二
二末 二月十五日

(7) 寛末仲春日

(8) 寬正第癸未二月十五日

(9) 寬正癸未仲春吉日

(10) 寬_{一一}二月十五日

(11) 寬正癸未仲春十有五

(12) 寬癸仲春仲旬

(13) 寬癸仲春十五日

(14) 寬_{一一}仲春日

(15) 寬正第_{一一}仲春三五莢

(16) 寬正_{一一}曆仲春三五日

(17) 寬未仲春三五莢

(18) 寬未仲春中五莢

(19) 寬癸仲春仲五吉

(20) 寬正四癸仲春仲旬五

(21) 寬曆第仲春十又五日

(22) 寬曆第_{一一}仲春三五日

(23) 寬正第_{一一}二月十五日

(24) 寬未仲春十余五日

(以下省略)

二、円寿寺本大般若經の考証

1. 刊行援助者

後に記す如く円寿寺本は恐らく春日版の後刷であると考えられるが、それは兎も角、この円寿寺所蔵の大般若經幾部かを刊行した費用を負担援助した者の名前と思われるものが写真版に示す如く各卷末（全卷ではない、寧ろ記入あるものは少ない）に左の如く版記されている。

大般若波羅密多經卷第五卷七十二の前行に

開板石清水 檢校 曾清 とある。（図版(6)）

開板とは木版時代の出版を意味することであるからこの第五百七十二卷の大般若經波羅密多經は当然石清水八幡宮の檢校である曾清が出版したもの、即ち出版費を負担したものと考えてよいと思う。然りとすれば

- (2) 第一百四十七の相国寺鹿苑院
- (3) 第四百七十九の光嚴
- (4) 第四百八十九の三河国和田大浜修理亮入道沙弥達於息女加□子
- (5) 第四百五十一 長歌楽大夫
- (6) 第四百五十二 阿闍利実□
- (7) 第四百九十七 願主実□
- (8) 第四百十九 沙弥祖妙
- (9) 第四百四十四 沙弥寿阿
- (10) 第四百六十七 小瀬十郎左衛門入道 法代沙弥

源清稱朝臣信詮^(カ)

- (11) 第四百一十四 越前権守□□
- (12) 第二百二十七 宗剛
- (13) 第五百八十 道初

以上各版記のそれぞれ、その署名者が拠金したものと思われる。

(以下省略)

2. 刊行援助者の略歴

A、曾 清

昭和十四年八月廿五日石清水八幡宮社務所編纂兼発行の石清水八幡宮史所載石清水祠官家系図九平等王院系図に曾清は次の如く記されてある。

襄清—曾清—

平等王院、又号牟礼

康永三年(一三四四) 月日、補權別当、貞和二年(一三四六) 八月五日、叙法眼、權少都、別当、延文五年(一三六〇) 二月三日、転任法印、応安四年(一三七七) 六月五日、補檢校、執務六年、明德二年(一三九二) 七月二十二日、任權大僧都、応永八年(一四〇一) 二月六日、入滅、六十四歳、異本、細川武州違上意、四國下向之時曾清依宮寺師職、同道牟礼莊ニ居住、以来号牟礼殿、婦洛之儀同時襄清室座女子、同時胎出以或子称襄清弟子養育之曾清実者他姓也、尊神依在機縁列神祠、但、無子孫、殊勝上意、鹿苑院殿、令順隨、不断殿中伺候、並枕御雜談、御成之御曾清参向、被立御輿被入闈食、天下無比類威勢也、イ本応安元・五・廿四、別当宜下

—臘清—立清—(以下省略)

本系図によれば曾清は義満の信性格別であつたことを知ることが出来る。猶お大般若經の刊行費を負担した時は檢校時代である。その檢校は本系図によれば応安四年六月五日に檢校に補せられ、執務六年にして、明德二年七月廿二日には權大僧都に任ぜられてゐる。それで刊行費負担金は応安四年六月五日より明德二年七月廿二日迄の間であることになる。

B、鹿苑院ニ足利義満

前記の通り卷第一百四十七には相国寺鹿苑院とある。その鹿苑院は足利義満が応永四年(一三九七)に建てた別邸を義満の死後その遺命によつて寺としたもので夢窓国師が開山となつてゐる。始めは鹿苑院と称したが間もなく鹿苑寺と改称された。その結構華美を尽し殊に金箔を塗つた場所が多いので、世に金閣寺とよばれた。(模範仏教辞典)円寿寺本大般若経卷第一百四十七には相国寺鹿苑院とあるが恐らく之は寺そのものでなく義満その人を指して居るものと思う。相国寺は義満が尊氏の天龍寺建立にならつて僧義堂を引いて、弘和三年(一三三三)に営んだもので工成つて義満は五山に列し南禅寺を五山の上に置いた。僧侶で將軍の顧問となり、指導者であつたのは夢窓(疎石)の外、義堂・絶海・靈見・明応等がある。特に義堂は義満の爲めに四書・五経を説き、五山の後嗣を定め、相国寺を建立し、義満厚く是を遇し、応待最も力めた。絶海もまた義満に信頼され政治・外交は勿論、諸將との交渉等に至るまで、与らざるはなく、真に幕府の重鎮であつた。靈見(字は性海、後不海子と号す)が住職を辞して野に臥すると、義満は是れを訪う事虚日なかつた。明応(字は空谷・若虚とも云う)は鹿苑院に住して常に義満の諮詢に応じたので、爾來鹿苑院主は幕府の最高顧問僧となつた。

また足利氏は源氏の支流であるが故に特に八幡宮を崇敬した。それで足利歴代將軍同様義満も八幡宮に参拝した。又春日社は興福寺に属してゐるので参拝寄附を怠らなかつた。北野社もまた崇敬し西京の酒麴税を収めて特別会計の恩典に浴せしめた其他しばしば仏寺の造営を行い、是が爲めに莫大の費用を抛つた。(足利十五代史一四六一―一五一頁)

斯様に義満は特に神仏を崇敬したので大般若経の刊行にも出金助力したものとと思われる。

C、光 厳

卷第四百七十九の光厳は光厳院だと思ふ。然りとすれば光厳天皇は御名は量仁、法名勝光智無範と号す。御伏見天皇の第三皇子、母は広義門院で北朝初代の天皇である。後醍醐天皇の太子となり元弘の変に笠置落城と共に北条氏に擁せられて皇位についた。在位二年で三年(一三三四)五月後醍醐天皇の京に入り給うに及んで、廃立。やがて尊氏の光明院擁立によつて太上天皇と号し院政をとつた。後薙髮して禅学を修め、丹波の山中に入つて常勝寺を創め、僧侶と共に修業した。貞治三年(南朝正

平十九年(一一三六四)七月七日に崩じた。寿五十二、丹波国北桑田郡山国村大字井戸山国陵に葬つた。(増訂国史大辞典)

D、其他は筆者の調査が未だ出来ていない。

3. 奉納神社名(図版(7))

写真図版に示す如く巻末に次の如くそれぞれ出ている。

- (1) 大般若経波羅密多経卷第三百二為天照大神
- (2) 全 第三百三 為春日
- (3) 全 第三百六 奉為西宮
- (4) 全 第三百七 為熊野権現
- (5) 全 第三百一十一 為振角明神
- (6) 全 第三百一十三 為貸布祈明神
- (7) 全 第三百一十五 奉為若一王子
- (8) 全 第三百一十七 法築北野天神 (以下省略)

4. 刊行時代の考証

円寿寺本大般若経は美しいことに第六百巻の後半がないので普通奥附のある部分も当然ない。それでその刊行年月と刊行者を知ることが出来ないのが遺憾至極である。然し以上述べた諸点から次の推定をなし得ると思う。

- (イ) 吉統の奉納文書の年次(文祿元年)
 - (ロ) 卷末記年が寛正四年であること。
- からその記年の寛正四年以前のものである。

- (イ) 佐田善神王寄進者の佐田昌佐が同時代の人であること。
- (ニ) 刊行援助者が室町初期の人である。
- (ホ) 紙質・印刷・紙の色其他が時代に合致
- (ハ) 春日版の後刷か

前篇第十二章で述べた如く川瀬氏はその著「日本書誌学の研究」中で大般若経の信仰が盛んになるにつれ、所謂春日版と称する初期の版木を引き続き使用した為に、版木が損傷磨滅を来たしながらも、漸次覆版補刻した。その為め一層磨滅して文字の判読さえ出来かねる春日版の室町中期の摺本が相当流布したと書いてある。円寿寺大般若経も写真版(8)が示す如く同一経本でありながら明暗が甚だしくて文字が読み難い。なお経巻中補刻したと思われ、殊更文字が新らしく鮮明なる部分が多あり且つ文字の行に乱れの部分のある点などから補刻充填した春日版の後刷と考えられる。何れにしても寛正四年以前のものであることは間違いない。(図版(8))

昨昭和廿六年八月、別府大学で文部省主催の図書館司書の資格認定の講習会があり、その講師として斯道の権威小野則秋氏が来別されたので、円寿寺本大般若経三・四冊を持参鑑定を乞うた。先生は深重に考慮の末速断出来ないから帰京の上研究してお答えすると申された。そしてその年十二月十八日付で「―今夏拝見の古経はその後研究して見ましたが、やはり春日版の後刷に間違いありません」との御教示を得た。

5. 絵 経Ⅱ 絵

円寿寺本大般若経は縦廿三・六種横九・一種の黄色折本六百巻で、その第二巻見返しに六頁に互る写真版の絵がある。(図版(9))
藤原秀衝の願経などは大般若経の見返しに必ずしも第一巻に限らず、第一百八十二巻、第二百六十六巻等、幾つかのちがつた見返し絵があるが、円寿寺本大般若経は、第一巻々頭の見返しに図の如き絵があるのみである。この図柄は国宝聖衆來迎

図(紀伊高野山藏・慧心僧都筆)などとほぼ似ていて、中央天がいの下に釈迦牟尼世尊の正覚像があり、その前の左右に仏、その左右に聖衆が続いているが後には誰もいない。而して向つて右側衆僧の前に経巻を背負つた玄奘三蔵が居る。この絵は経文と同じ黄色の用紙に色彩のない墨絵でかいてある。玄奘はたぶん印度巡遊、各地で教えを受け、資料の経文を蒐集して背負つていゝるのではあるまいか。

大般若経や、心経、理趣分等の巻頭見返し絵は必ずしも同一でなく、その刊行のことなるによつて、それぞれ独自のものが描かれてある。それで鉄眼版と円寿寺本は相違した見返し絵である。

十六善神は般若経を護ると誓はれた仏であるが、図の如く円寿寺本はその仏の数に於て相違しているので勿論十六善神ではないと思う。この巻頭見返し絵によつても、円寿寺本大般若経の年代や刊行者なども推定出来ると思ふが、遺憾ながら筆者はこの円寿寺本と同一の古版本大般若経の完本を見たことがないので比較対照することが出来ない。それで無論年代・刊行者を推定し得ない。敢えて読者の御教示を願う次第である。

6. 修 繕

円寿寺では現在大般若経全巻を箱に収めてあるが、その第一函の裏正面に次の如く書いてある。(図版(10))

当山伝来之大般若六百軸及修函共、往古大友吉統公之寄附而既経過三數百之星霜二大極三被却二矣依レ之這回募三十方檀越淨財一新調修函了、仰翼信心施主因レ此善利ニ現世一、極ニ福寿ニ欣愉当来登仙陀金臺至祝至祈

右施主

大分郡古国府村

高屋民三郎

そして左横に

当山四十六世勤息 順慶代

右横に

明治十九年三月廿六日

と書いてある。

備考 同村利根玄寿氏施主の箱も右同様、尚高木施主の箱には次の如く書いてある。

今回募_二十方檀信淨財_一、新調_二六般若經之修函_一、遠願主祈_二靈魂豁悟_一、近擬_二施主愜篤願_一、因_二此善緣_一、來世共登_二仏陀金臺_一、

大分町

施主 高木栄太郎

本修理は明治十八、九年の交順慶住職の時六般若經幾冊宛かを持参して地方の各戸を巡り、本人名、又は先祖の法名等を入らせて喜捨を受けて修理費にあてたものと思われ、各巻にその記入がある。写真版(6)の(口)にある書込はその一例である。尚、表紙と題簽は明治初年か又はその以前の修理の際更えたもので原形のものではないと思う。白紙裏打の最近の修繕は現住職代(昭和廿年頃)篤志家による素人の修理である。従つてお経の継ぎ方などにも無理がある。

五、円寿寺略史

1. 所在地

現在円寿寺は大分市大字上野字六坊にある。地は上野台地の中央にあり、東北一帯は元町に続いている。この六坊の地域は往時円寿寺の六坊即ち東井・仏性・法惟・実相・宝幢・幽栖の各坊の所在地が地名となつたものである。

因みにこの外境内に六坊以外真如・中道の二坊と菩提寺があつたと雉城雜誌には書いてある。(図版卅)

2. 由緒

本寺は大友六代貞宗が古くより大分市古国府にあつた岩屋寺が荒廢していたのを徳治二年(一三〇七)に再興した寺である

其後歴代大友氏の帰依厚く、寺領の寄進、若宮・祇園・松坂等上野地域各社を始め、由原・関（佐賀関（北海部）・六所（由布院）等大友家代々が崇敬した神社の別当職を兼ねさせられて、法燈殿盛を極め、大友以後も歴代国主の信仰を得、星霜六百三十有余年を経て明治を迎えた。ところが明治維新の排仏毀釈の反動で、寺の内外共に一時非常なる非運に遭遇し、為めに寺領を失い、寺域はせばめられ、今では六坊中僅かに東井坊只々一つを残すのみとなつてゐる。幸い現住職秦亮雄師の努力経営宜敷を得て日を追い順次復旧されつつあることは喜ぶべきことである。後に記す数々の文化財は昔を語り寺の由緒を示す好史料で往時の寺格を教えている。

豊後の惣社も何時か本地域高台に勧請せられて（現、寺の南向い田北学氏附近がその所在地であつたが今は社はない）が今は小字名として残つてゐる。円寿寺がその山号を惣社山と称し寺宝の一つに写真の如き天和年の「惣社大明神」の木製榜額（朝都鳴山書長さ縦四九糎横廿二糎）がある。（図版②）

3. 岩屋寺

岩屋寺は円寿寺台地の南西直下、旧豊後国府の所在地古国府村に国府時代からあつた市内でも最も古い寺の一つで、現存の岩屋寺や元町の石仏は昔は岩屋寺のもので境内にあつたとのことである。今も昔の岩屋寺地域内の一部が小字名となつて石仏と共にありし昔を偲ぶよすがとなつてゐる。（図版③）

岩屋寺の由緒に就ては豊後聞書に「僧日羅者、嘗經^二過^一于此^一、見^三翠崖^二崔魏^一曰、靈場也。遂就^二其窟^一自刻^三藥師^二二光^一仏、及十二神佛像、以結^レ字、名^レ岩屋寺^一。此地海近水鹹、及祈禱擊^レ石、靈泉湧出、呼曰^三關伽井^一。」と伝え、雉城雜誌其他の郷土誌は皆この説をとつてゐる。

昔岩屋寺の境内にあつたと伝うる前記元町や龍ガ鼻の石仏は共に日羅の作となつてゐるが故京大教授浜田耕作博士は平安初半期のものと推定してゐる。龍ガ鼻石仏群の東端樹下の巖面にある千仏龕は龕下多くの磨崖石仏中類例を見ないものである。

岩屋寺石仏と附近、曲の石仏、並びに大分町高瀬の石仏等々皆小川琢磨、小野玄妙、浜田耕作其他数々の学者、芸術家を始め多くの人々より、臼杵石仏よりも早くから推賞されている石仏で確かに大分市の有力なる觀光資源の一つで今後も大いに保存顕彰すべきものである。

4. 大友 貞宗

貞宗は大友第六代で近江守と称し、五代貞親の長子で従四位上に叙せられた。文保二年（一一三一）家を子氏泰に譲り、剃髮して具簡と号した。名和長年が後醍醐天皇を船上山に迎えた際、貞宗は遙かに疑を通じてこれに応じ、一時は菊地武時等と共に九州探題赤橋英時を討たんとしたが、鎌倉を憚つて兵を出さなかつたのみか、之れを怒つた菊地武時を少貳貞経と共に破つた。然るに元弘三年（一一九三）五月六日六波羅の陥落をきき、天下己に北条氏のものでないことを察した貞宗は貞経と謀つて不忠の罪を免れようと島津貞久をも加えて、共に英時を撃つて自殺させた。後に足利尊氏に味方して大いに犬馬の働きをしたのは、建武の朝廷が大友・少貳の罪を問うたさい尊氏がとりなした恩に報いたものと云われている。因みに貞宗（直菴）は生前に法華経を開版して二千部という多数を印施したことが義堂周信の貞宗七周忌の供養に際し、上野金剛寺に於いて觀世音を慶讚して陞座した語に、

直菴菴居士、宿殖德本、修諸善根、財施法施左之右之、建接待也、割腹田以供十方雲水之僧、永永弗絶、刊法華経也、各印一本、以施二千清浄之衆、展転無尽、此経中云、若自書、若教人書、是人功德無量无边、能生一切種智、又佗経説云、若人紙墨自書、若令人書写如来正典、然後与人令得読誦、是謂法施矣、居士既印施二千部、則此功德莫大焉」（義堂和尚語録）とあるによつて明かである。その年代は明かでないが、恐らく延文・貞治の頃であろう、そして二千部も印施したのに今日一部も発見されていない惜しいことである。（日本印刷文化史自二九二頁至二九三頁）

因に朝鮮の史書によると、大友第十二代持直は、永享元年（一四二九）船を朝鮮に遣わして大般若經一部を受けている。（

「大分県の歴史と文化」一三七頁）但この大般若經の奉納先と現存の有無に就ては不明である。

5. 中興開山道勇（図版⑬）

豊鐘善鳴録には

釈道勇姓ハ藤氏近衛閔白兼経公子也、初登叡山、落飾升壇、学通内外、履業嚴潔。嘉元未遊、徳治丁未大守藤貞宗、大友氏新建総社山円寿寺、延勇為開祖、蓋福国家也、文保二年九月末、現微疾、至霜月二十九日、恬然長逝、勇有弟子、号月江、研綜経律、識行清正、亟参万寿直翁和尚、諮受禅要、継勇之踵、住持円寿、日用起止都遵禅規、歿後禰以禅師、其得直翁許可、可以觀焉、と。

然るに元禄十二年編述の「豊府聞書」には次の如く詳述されてある。

府主或時対蔭山直翁、問嚴屋寺之事、師答曰、国民伝説、昔敏達天皇六年丁酉十一月、從三百濟一貢三仏経禅律並仏工寺匠等於日本、同十二年、百濟之日羅来本朝、及赴洛、遇三当郷、称曰、可与仏闍之霊場也、戮力于仏工、彫刻我々青巖、作觀自在岩仏並脇侍菩薩、又乘師及十二師、乃築名岩屋寺、地中無一水、日羅以忤欽加持、其地急清水湧出、名曰開伽井里、即日羅赴京師、謁聖徳太子、同年十二月、太子誅守山、於之豊聰太子弘釈教於日本國中、於豊後之国守奉太子之命、再建岩屋寺、成大迦藍、九閑最初之霊地也、厥後罹兵烟、為烏有再三、其岩仏免之伝今貞宗聞之甚敬崇、直師、且前王玉山所崇之道勇在台領吾与道勇嚮有約、願使主岩屋寺、府主以先君之好幸応之乃遷岩屋寺於山上、當伽藍請勇師、徳治二年冬、師入豊府大友氏父子郊迎而移精舎、即勸請惣社大明神、故名惣社山、改号円寿寺、以寄郡庄、以日羅為開山、以道勇和尚為中興之祖、安寺院六坊、使司四黎之衷儀、於伝教大師忌日、每年五九月四日、令多衆論法華八講、又勇師受延曆寺主命、西海路台山本院首」。

尚雉城雜誌には

喜元三年、大友貞親比叡山道勇和尚ヲ招請シテ岩屋寺ニ迎フ……………徳治二年、大友貞宗父祖ノ志願ヲ継テ岩屋寺ヲ今ノ地

ニ移シ、惣社山円寿寺ト改メ、東井……………六坊ヲ建」。とある。

6. 日根野吉明 (図版(14)(15)(16))

竹中氏の後をついで府内城主となつた、英主日根野吉明は当時の円寿寺住職寛佐に帰依し寺領を献じ、その死後は当寺に葬られ、公の守本尊不空成就仏像掛絵は寺宝の一つとして今も保存され、墓碑も同寺境内にある。そして公の命日には毎年その墓前で公によつて開鑿された初瀬井路關係の各町村、恩恵を蒙つてゐる農民多数は報恩感謝の供養会を行つてゐる。

7. 寛佐法印

大分郡湯布院町(元速見郡由布院)の豪族、奴留湯氏に生れた寛佐は円寿寺で得度し、後叡山に登つて天台の教義を修めて阿闍梨の位に上り、宗学の傍、京都里村昌琢に就て連歌や国文を学びすぐれた門下の一人となつた。昌琢は特に父相伝の「伊勢物語」や「源氏物語」を寛佐に伝授した。(図版(20)) 寛永三年(一六二六)九月には師昌琢等と百韻連歌を行つてゐる。帰国後は円寿寺東井坊に入つて中興の僧となり時の国主日根野吉明や隣村津守配流中の一伯、松平忠直公並びにその監視として市内北町に来ていた監檢使牧野伝藏等より特に信仰された。(図版(19))

昌琢同門の西山宗因はわざわざ寛佐を豊後上野に訪ねた。寛佐は師昌琢よりの依頼により宗因に源氏物語の伝授をしてゐる。宗因の次の句は当時の作で寛佐に師事した一証左ともなつてゐる。

「豊後寛佐庵を尋ねし時」と題して

玉はこのたよりになすな山桜 宗因

奴留湯氏は大友氏の庶流戸次氏の出で由布郷温湯(ぬるゆ)を本拠とし、北海部郡大在地方をも領有し大友氏の有力部将であつた。宗麟時代の一族奴留湯主殿正は日向耳川敗戦後、帰国キリシタンを信仰し由布院に大分・臼杵・野津に匹敵する教会

を設立し宗麟をも迎えたこともある。現在奴湯氏の子孫は別府市東山田代と熊本県菊地郡七城村に居り共に大友時代の古文書を持つている。

因みに慶長五年（一六〇〇）四月豊後臼杵に漂着したオランダ船リーフデ号の裝飾木像オランダエビス貨荻（カテキ）様を祭つてある栃木県足利郡吾妻村羽田の龍江院は、豊後府内の目付であつた牧野伝藏の父成里の開基で、この寺に牧野伝藏成純の曾祖父古白居士成時の一周忌追善の爲め連歌の名匠宗長の百韻連歌の一卷がある。その本文の末に成純の豊後府内の目付在任中、円寿寺寛佐に依頼してその識語を寛永十五年三月付で録してある。

8. 松平忠直（一伯公）

菊地寛の忠直行状記で周知の一伯松平忠直が隣接地大分市の津守配流中、円寿寺をも帰依し今も忠直公献納と称する仏像や掛物や水滴（寛佐の法弟、国東富貴寺の住職寛佐が持参、同寺に現存）は寺宝として保存されている。現在の円寿寺本堂は一伯公死後その居館を日根野のあつせんで円寿寺に寄贈されたものと伝承されている。

9. 円寿寺の文化財

A、古文書

イ、権少僧都道勇置文（一）（図版③）

ロ、全

ハ、義宣書状（二）

ニ、大友義鎮安堵状（三）

ホ、大友宗麟安堵状（四）

へ、大友義延 義乘書状 (五)

ト、大友義統安堵状 (六) (図版④)

チ、全前 (七)

リ、大友義統書状 (八)

ヌ、大友親敦 義鑑安堵状 (九)

ル、大友義統安堵状 (一〇)

ヲ、大友氏奉行人連署奉書 (一一)

ワ、惟久、能佐連署奉書 (一二)

カ、大友義統安堵状 (一三)

コ、大津留某遺言状 (一四)

ク、大友吉統 (義統) 書状 (一五) (図版②)

備考 数字は大分県史料大分県諸家文書所載円寿寺文書番号

レ、観理院大僧都「御条制」

ロ、天海大僧正書状 (中村内匠宛)

ツ、惣社大明神社再修理料下附状 (図版⑧)

ネ、法橋昌琢伝授状

ナ、大猷院様御供料寄附状 (図版⑦)

B、遺物

イ、本尊不動明王像 日本彫立像古仏で直立像

ロ、田植不動明王像 日本彫立像上体やや右にねじた姿勢、彩色のあとがある。田植不動の名の示す興味ある伝説がある。「雉城雜誌」はこの像を本尊としてある。

ハ、愛宕神像 日根野吉明（一五八六一一六五六）の発願により、当時境内に愛宕社を創建し、府内火伏の守護神とした
ニ、惣社大明神像と榜額（図版17）

ホ、一伯公守本尊摩利支天像 木版黒刷

ヘ、日根野侯守本尊不空成就仏像 絹本極彩色、画像の表装裏にその縁起を記した識文がある。（図版18）

ト、寛佐自筆自面賛 紙本、左下隅に自像、上に賛として「またきに今朝や春の来ぬらん寛佐」の一句が認めてある。（図版19）

チ、不動不二童子像 伝鳥羽僧正筆

リ、柿本人丸像 横軸、伝信実の筆

ヌ、釈迦坐像 伝恵心僧都筆

ル、三尊成道画 伝唐禅月う筆

ヲ、不動明王像 伝弘法大師筆

ワ、文珠菩薩像 伝慈覚大師筆

カ、児文珠像 伝狩野四郎次郎筆

ヨ、馬絵屏風 一双 寺伝狩野元信筆「豊国小志」は伝土佐光元筆と。各半双につなぎとめた馬六頭に、松・楓・桜をあしらつてある。此の屏風の馬にも伝説がある。（図版20）

タ、朱塗の食器櫛 伝大友能直所用品

C、遺 跡

イ、日根野吉明の墓と廟（図版14、15）

口、全歌碑

ハ、其の他

四、終りに

円寿寺は大分市上野にある。上野は大友氏歴代の居館のあつた所。今日大友廿二代の武家政治とその文化は、我が国史上では小さな存在ではない。その点から二豊大分県の文化は大友氏により、そして上野が発生地だと云つても過言ではあるまい。その上野大友屋敷に続く北下に筆者は住んでいる。

円寿寺は六代大友貞宗の建立、その由縁の寺に廿二代吉統が奉納した古版経、それは前述した諸点によつて春日版の室町時代後刷と推定されるもの、こうした由緒のある円寿寺大般若経も、本稿の最初に述べたように、今日では由緒ある古版経たることを、一般市民は勿論、信徒さえも忘れて知る者がない。まして学界にはかつて一度も研究対照となつたことがない。同じ地域内に住む筆者は、四・五年前、大谷大学五来教授をこの寺に案内した時、たまたま、この大般若経の言冊を抜き出したところ、寛正四年の記入があつたことから関心を持ち、爾来いささか研究を続けたが、何分この方面に智識を持たない筆者、日暮れて道遠しの感をいだくのみ、従つて以上記した本研究は、甚だ不充分的の研究で杜撰なものではあるが中間報告の意味で書いたものである。幸にこれが機縁となり世人の関心を買ひ、他日これが研究者の一参考資料となり、本大般若経研究の一段階となり得るならば幸甚の至りである。

県下に多くの類例を見ない、この古版本円寿寺大般若経に就ての、この小研究が、その不備、不足を、読者諸賢の御指摘と御教示によつて正誤・是正し・補訂するを得れば筆者はもとより円寿寺の光栄であると共に、仏徳の顕彰にも寄与し得る次第と思ふ。

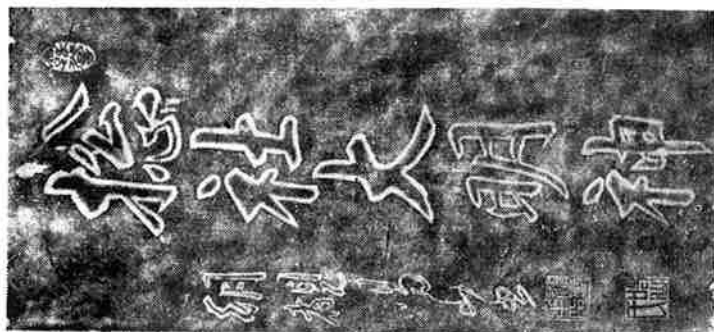
丙、参 考 文 献

	書 名	著 者	書型	発行年月日	発 行 所
1	日本古印刷文化史	木宮 泰彦	A五	昭七、二、八	富山房
2	日本出版文化史	小林 善八	A五	昭一三、四、廿九	日本出版文化史刊行会
3	日本書誌学の研究	川瀬 一馬	A五	昭一八、八、一〇	講談社
4	日本歴史考古学	後藤 守一	A五	昭一二、七、一八	四海書房
5	仏教考古学講座第一卷		A五	昭一二、三、一〇	雄山閣
6	全 第五卷		全		全
7	広文庫(第十一冊)		A五	大五、十二、一	広文座刊行会
8	日本宗教大講座(第十二卷)	辻善之助外教氏	A五	昭四、一〇、一〇	東方書院
9	風俗辞典	森末、日野共著	B六	昭三二、十一、二五	東京堂
10	奈良文化の伝流	永島福太郎	A五	昭廿六、二、廿八	目黒書店
11	新訂日本文化と仏教	辻 善之助	A五	昭廿六、一二、三〇	春秋社
12	古写経の鑑賞	田中 塊堂	B六	昭一九、九、五	宝雲社
13	解説日本文化史	栗田 元次	A五	昭五、七、一五	明治図書株式会社
14	日本文化史	笹川 種郎	A五	昭六、一〇、廿八	雄風館
15	日本書誌学概説	和田 万吉	A五	昭一九、一、廿一	有光社
16	鎌倉武士の精神	室田 泰一	B六	昭一八、九、二〇	永沢金港堂
17	日本密教史	松永 有見	A五	昭四、五、一八	二松堂
18	加持祈禱秘密大全	小野 清秀	B六	昭十一、一二、五	大文館

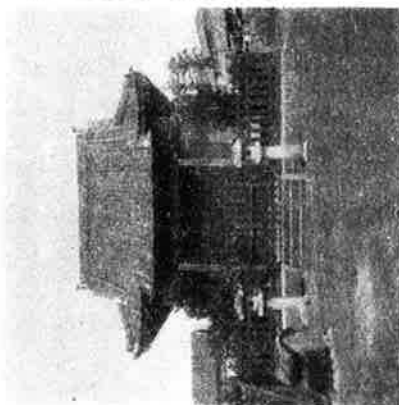
19	新国史観卷三	中村 老也	B 六	昭廿二、一二、廿五	雄山閣
20	日本仏教史上世編	辻 善之助	A 五	昭一五、十一、三〇	岩波書店
21	神祇辞典	山川 鶴市	A 五	大二三、五、一〇	平凡社
22	豊府古蹟研究(第二冊)	十時吏司外三氏	A 五	昭五、十一、三〇	郷土史蹟伝説研究会
23	般若心経講義	高神 覚昇	B 六	昭九、六、一七	第一書房
24	補訂 仏教大辞典	織田 得能	A 五	大六、一、五	大倉書店
25	増訂 国史大辞典	八代 国治	A 五	大四、五、五	郁文社
26	郷土社会事典	青野 封郎外	B 四	昭卅一、一〇、一	金子書店
27	誌史備要	東京帝国大学史料編纂所 岡野他家夫	B 六	昭卅四、七、一	日本書籍株式会社
28	日本出版文化史	新野 出	A 五	昭三〇、五、廿五	春歩堂
29	広辞苑	山岡 瑞丹	A 五	昭一八、四、二〇	岩波書店
30	皇道と密教	宇井 伯寿	B 六	昭八、十一、二〇	銀行信託社
31	仏教汎論下巻	鷲尾 順敬	A 五		岩波書店
32	日本教団像選	市史編纂審議会	B 六		東方書院
33	大分市史上巻	全	A 五	昭卅一、三、卅一	大分市役所
34	全 下巻	寺本 広作	A 五	昭三六、一〇、一〇	大分市役所
35	熊本県史料中世篇	逸見 梅栄	A 五	昭三五、七、一〇	熊本県
36	観音像	伊豆宥法	A 五	昭八、六、一〇	誠信書房
37	新纂仏教図鑑	村上 専結	A 五	昭一四、二、一五	仏教珍籍刊行会
38	日本仏教史綱上巻		新四六版		創光社

89	仏教辞典	禿氏 祐祥	新四六版	昭九、五、一五	前田大文館
40	宇佐郡寺院史論	榎園 謙吾	A五	大八、一〇、三〇	著者
41	足利十五代史	国史研究会	A五	昭二、九、廿四	大同館
42	大友史料第一輯	田北 学	A五	昭十二、三、三一	全洋堂
43	豊後史蹟考	佐藤藏太郎	A五	明	甲斐書店
44	大分市史	大分市役所	A五	大四、四、二〇	大分市役所
45	大分市誌	伊藤 正男	A五	昭十二、五、一七	全国市町村誌刊行会
46	奈良時代文化雑攻	石田 茂作	A五	昭一九、八、三〇	創之社
47	日本仏教思想史	古田 紹欽	新四六	一九六〇、九、二〇	角川書店
48	宇佐山郷先達伝	大隈 米陽	B六	昭廿九、一〇、三一	宇佐山郷文化協会
49	豊前国佐田郷土史	大隈 米陽	A五	昭	
50	北豊中心郷土史年表	全 人	B六	昭卅二、七、一〇	宇佐山郷文化協会
51	大友史料第二輯	田北 学	A五	昭一三、三、一〇	全洋堂書房
52	宇佐下毛諸家文書	大分県史料刊行会	A五	昭卅二、七、二〇	大分県立教育研究所
53	大分県郷土史料集成上	垣本 言雄	A五	昭十一、七、一〇	大分県郷土史料刊行会
54	全 地誌篇	全	A五	昭一五、六、二〇	全
55	大日本全史上巻	大森金五郎		大一〇、四、一〇	富山房
56	日本仏教の開展とその基調(上)	裕慈弘		昭廿三、十一、三〇	三省堂
57	昭和新纂国訳大蔵経經典部第三卷			昭三、九、一五	東方書院
58	全			昭三、一〇、十二	全

20 川寿寺所藏總社の額（坂辺澄夫大教授拓本）



21 日根野吉明公剛



25 日根野吉明公墓碑（川壽寺境内）

